

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 832 集

H  
I  
E  
比 恵 遺 跡 群 37

— 第 82 次調査報告 —



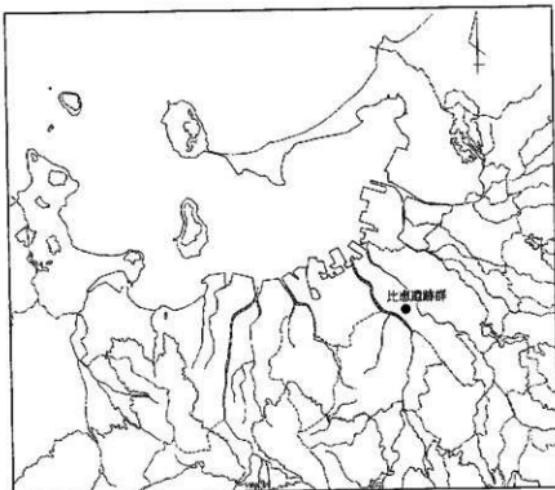
2004

福岡市教育委員会

岡三リビック埋蔵文化財調査室

H I E  
比 恵 遺 跡 群 37

— 第 82 次調査報告 —

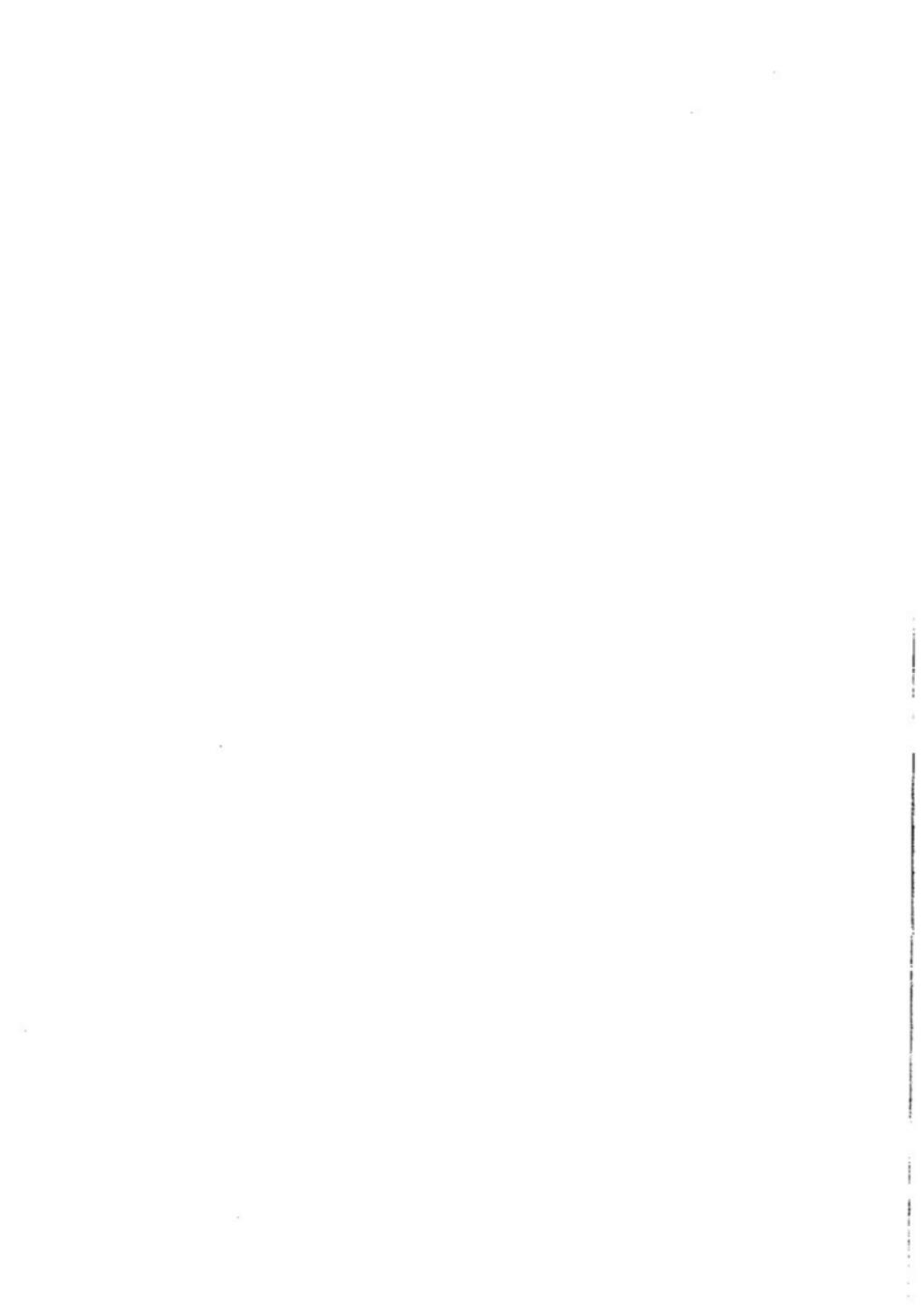


遺跡略号 HIE-82  
調査番号 0308

2004

福岡市教育委員会

岡三リビック埋蔵文化財調査室





カラー写真1. 第82次調査遺跡全景（南東から）



カラー写真2. SE010 井戸跡遺物出土状況（北から）



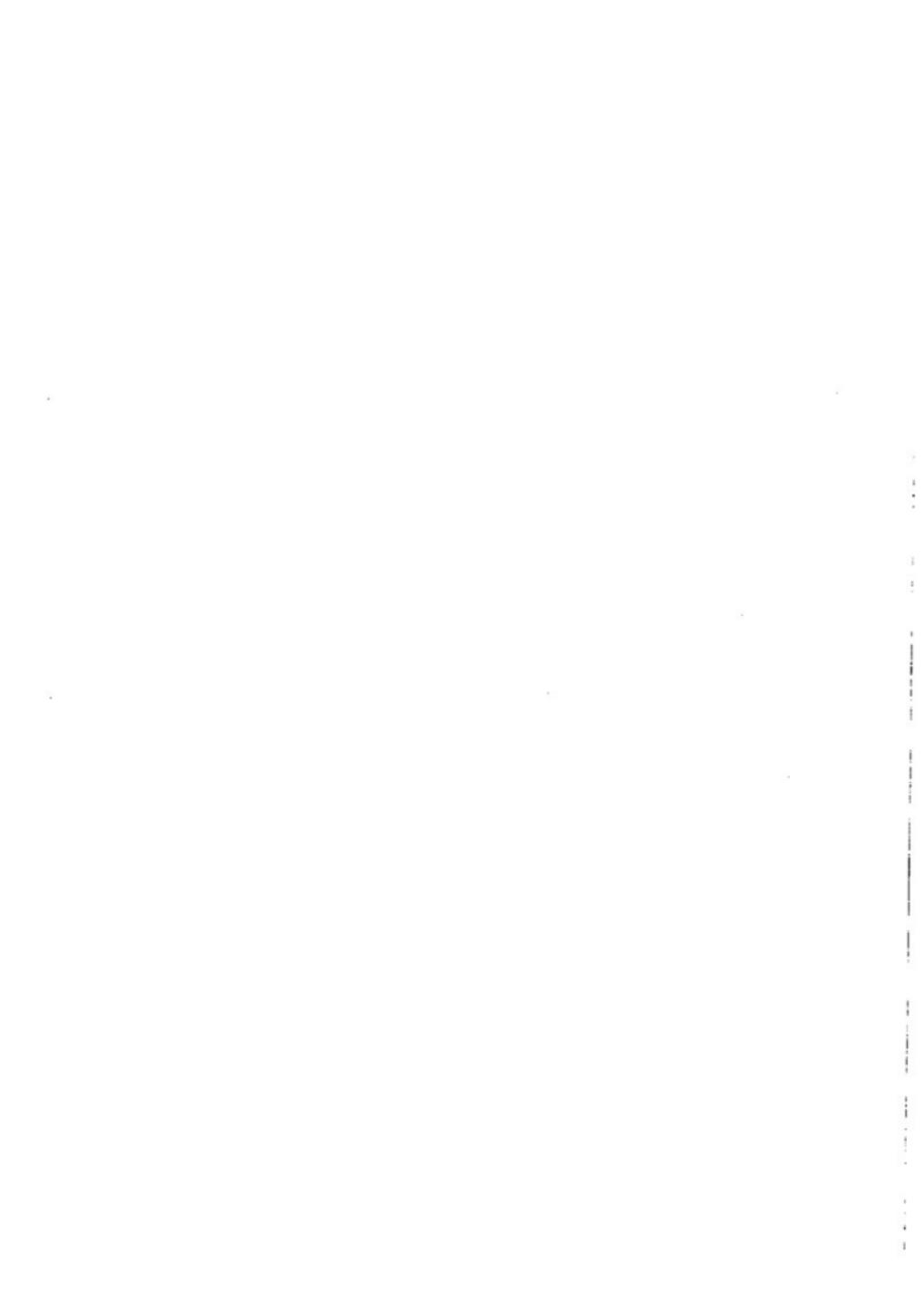
カラー写真3. SE027 井戸跡遺物出土状況（北から）



カラー写真4. SE028 井戸跡下層下面遺物出土状況（北西から）



カラー写真5. SE028 井戸跡作業風景（北から）





カラー写真6. 第82次調査出土土器



カラー写真7. SEO21 井戸跡出土長頸壺



## 序

現在、国際化の流れの中で、アジア地域により一層開かれた国際都市を目指し、まちづくりを進めている福岡市は、古くからアジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市では、この交流を物語る文化財の保護、活用に努めていますが、開発によりやむを得ず失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は博多区比恵遺跡群内の開発事業に先立って行われた第82次発掘調査を報告するものです。調査の結果、弥生時代から中世における遺構および遺物が発見され、当時の生活を復元する上で多大な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまでの、費用負担などのご協力を賜りました株式会社レッドキャベツ様をはじめとする関係者の方々および地元の方々には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表すとともに、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成16年8月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

## 例　　言

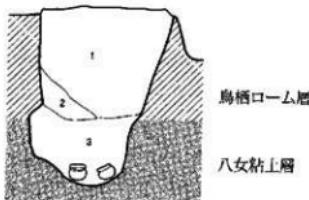
1. 本書は福岡市教育委員会の指導のもと、2003年5月6日から2003年8月14日にかけて、岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室が実施した、燐れッドキャベツの店舗建設に伴う比恵遺跡群の第82次発掘調査の報告書である。
2. 本書の執筆・編集は堀尾孝志・中山浩・天野直子・入江俊之が分担して行った。
3. 遺構の実測図は中山・入江が行なった。
4. 遺物の実測図は大野・平野由紀子・相原正人・佐田裕一・中下まり江が行なった。
5. 遺構・遺物のトレイス図は、Adobe Illustrator 10を使用し、松尾祥子・倉園真記が行った。
6. 遺構・遺物の写真は中山が撮影した。
7. 遺構及び遺物の色調については、『新版標準土色帖 2002年版』を基準にした。
8. 遺構番号は調査区内で連番をつけ、遺構の略号を冠して呼称する。遺構の略号は以下の通りである。  
掘立柱建物 SB ・ 積穴住居跡 SC ・ 溝 SD ・ 井戸 SE ・ 土坑 SK  
柱穴、小穴 SP ・ その他 SX
9. 方位は磁北であり、真北から $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
10. 本報告書に係わる図面、写真、遺物等は、『埋蔵文化財の整理・収藏要項』福岡市教育委員会 1994年に従い、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する。

## 凡　　例

### 1. 遺構平面図の見方

- ① 基本土層は2種類の、トーンによって分けられる
- ② 井戸跡の断面図における出土遺物は投影図とする

A— 550-

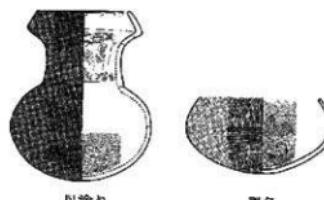


### 2. 遺物実測図の見方



断面にトーンのあるものは須恵器を表す

断面のトーン



丹塗り　黒色

## 本文目次

I.	はじめに	
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査体制	1
II.	遺跡の概要	
1.	遺跡の立地と環境	2
2.	遺跡の歴史的背景	2
III.	発掘調査の記録	
SE001		7
SE002		8
SE003		8
SE004		15
SE005		16
SC006		17
SC007		18
SE008		19
SE009		20
SE010		21
SE011		23
SE012		25
SE013		27
SK014		28
SD015		29
SD016		30
SE017		31
SE018		32
SE019		33
SE020		35
SE021		36
SE022		37
SE023		37
SE024		38
SE025		38
SD026		39
SE027		40
SE028		43
SX029		50
IV.	まとめ	
1.	第 82 次調査の成果	53
2.	比惠遺跡の意義	54

## 挿図目次

Fig. 1	比恵遺跡群と周辺遺跡	3
Fig. 2	調査区位置図-1	4
Fig. 3	調査区位置図-2	5

Fig. 4	第 82 次調査全体図	6
Fig. 5	SEO01 遺構平断面図	7
Fig. 6	SEO01 出土遺物実測図	7
Fig. 7	SEO02 遺構平断面図	8
Fig. 8	SEO03 遺構平断面図	8
Fig. 9	SEO03 出土遺物実測図-1	9
Fig. 10	SEO03 出土遺物実測図-2	10
Fig. 11	SEO03 出土遺物実測図-3	11
Fig. 12	SEO03 出土遺物実測図-4	12
Fig. 13	SEO04 遺構平断面図	15
Fig. 14	SEO04 出土遺物実測図	15
Fig. 15	SEO05 遺構平断面図	16
Fig. 16	SEO05 出土遺物実測図	16
Fig. 17	SCO06 遺構平断面図	17
Fig. 18	SCO06 出土遺物実測図	18
Fig. 19	SCO07 遺構平断面図	18
Fig. 20	SE008 遺構平断面図	19
Fig. 21	SE008 出土遺物実測図	19
Fig. 22	SE009 遺構平断面図	20
Fig. 23	SE009 出土遺物実測図	20
Fig. 24	SE010 遺構平断面図	21
Fig. 25	SE010 出土遺物実測図	22
Fig. 26	SE011 遺構平断面図	23
Fig. 27	SE011 出土遺物実測図	24
Fig. 28	SE012 遺構平断面図	26
Fig. 29	SE012 出土遺物実測図	26
Fig. 30	SE013 遺構平断面図	27
Fig. 31	SE013 出土遺物実測図	27
Fig. 32	SK014 遺構平断面図	28
Fig. 33	SK014 出土遺物実測図	28
Fig. 34	SD015・016 遺構平断面図	29
Fig. 35	SD015 出土遺物実測図	30
Fig. 36	SD016 出土遺物実測図	30
Fig. 37	SE017 遺構平断面図	31
Fig. 38	SE018 遺構平断面図	32
Fig. 39	SE018 出土遺物実測図	32
Fig. 40	SE019 遺構平断面図	33
Fig. 41	SE019 出土遺物実測図-1	33
Fig. 42	SE019 出土遺物実測図-2	34
Fig. 43	SE020 遺構平断面図	35
Fig. 44	SE020 出土遺物実測図	35
Fig. 45	SE021 遺構平断面図	36
Fig. 46	SE021 出土遺物実測図	36
Fig. 47	SE022・023 遺構平断面図	37
Fig. 48	SE024 遺構平断面図	38
Fig. 49	SE025 遺構平断面図	39
Fig. 50	SE025 出土遺物実測図	39

Fig.51	SD026 遺構平断面図	40
Fig.52	SE027 遺構平断面図	40
Fig.53	SE027 出土遺物実測図-1	41
Fig.54	SE027 出土遺物実測図-2	42
Fig.55	SE028 遺構平断面図	44
Fig.56	SE028 山土遺物実測図-1	45
Fig.57	SE028 出土遺物実測図-2	46
Fig.58	SE028 出土遺物実測図-3	47
Fig.59	SE028 出土遺物実測図-4	48
Fig.60	SX029 遺構平断面図	51
Fig.61	SX029 出土遺物実測図	51

## 表目次

Tab. 1	SE001 出土遺物観察表	7
Tab. 2	SE003 出土遺物観察表-1	13
Tab. 3	SE003 出土遺物観察表-2	14
Tab. 4	SE004 出土遺物観察表	15
Tab. 5	SE005 出土遺物観察表	17
Tab. 6	SE006 山土遺物観察表	18
Tab. 7	SE008 出土遺物観察表	19
Tab. 8	SE009 出土遺物観察表	21
Tab. 9	SE010 出土遺物観察表	22
Tab. 10	SE011 山土遺物観察表	25
Tab. 11	SE012 出土遺物観察表	26
Tab. 12	SE013 出土遺物観察表	27
Tab. 13	SK014 出土遺物観察表	28
Tab. 14	SD015 出土遺物観察表	30
Tab. 15	SD016 出土遺物観察表	31
Tab. 16	SE018 出土遺物観察表	32
Tab. 17	SE019 出土遺物観察表	34
Tab. 18	SE020 出土遺物観察表	35
Tab. 19	SE021 山土遺物観察表	36
Tab. 20	SE025 出土遺物観察表	39
Tab. 21	SE027 出土遺物観察表-1	42
Tab. 22	SE027 山土遺物観察表-2	43
Tab. 23	SE028 出土遺物観察表-1	48
Tab. 24	SE028 山土遺物観察表-2	49
Tab. 25	SE028 出土遺物観察表-3	50
Tab. 26	SX029 出土遺物観察表	52

写真 4.SE028 井戸跡下層下面遺物出土状況  
 写真 5.SE028 井戸跡作業風景  
 写真 6. 第82次調査出土土器  
 写真 7.SE021 井戸跡出土長頸壺

## PL.1

- ①. SC006 積穴式住居跡
- ②. SC007 積穴式住居跡
- ③. SD015・O16 溝跡
- ④. SD015 溝跡 作業風景
- ⑤. 調査地区中央付近の井戸跡集中箇所

## PL.2

- ⑥. SE001 井戸跡遺物出土状況
- ⑦. SE005 井戸跡遺物出土状況
- ⑧. SE009 井戸跡遺物山土状況
- ⑨. SE009 井戸跡から出土した壺
- ⑩. SE019 井戸跡遺物出土状況
- ⑪. SE021 井戸跡遺物山土状況

## PL.3

- ⑫. SE025 井戸跡遺物出土状況
- ⑬. 井戸跡掘削作業風景
- ⑭. SE027 井戸跡下層上面遺物出土状況
- ⑮. SE028 半裁完掘状況
- ⑯. SE028 井戸跡下層上面遺物出土状況
- ⑰. SX029 不明遺構

- |        |      |         |
|--------|------|---------|
| PL. 4  | 遺物写真 | 001～009 |
| PL. 5  | 遺物写真 | 010～018 |
| PL. 6  | 遺物写真 | 019～029 |
| PL. 7  | 遺物写真 | 030～042 |
| PL. 8  | 遺物写真 | 043～057 |
| PL. 9  | 遺物写真 | 058～076 |
| PL. 10 | 遺物写真 | 077～088 |
| PL. 11 | 遺物写真 | 089～099 |
| PL. 12 | 遺物写真 | 100～109 |
| PL. 13 | 遺物写真 | 110～120 |
| PL. 14 | 遺物写真 | 121～130 |
| PL. 15 | 遺物写真 | 131～145 |

## 図版目次

### 巻頭図版

- 写真 1. 第82次調査遺跡全景  
 写真 2. SE010 井戸跡遺物出土状況  
 写真 3. SE027 井戸跡遺物出土状況

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

平成 15 年 3 月 20 日に、㈱レッドキャベツの代表取締役社長・岩下義之氏より、福岡市博多区博多駅南 6 丁目 9 番地 7 号（総面積 6611.99 m<sup>2</sup>）について、店舗建設に係る埋蔵文化財事前審査願が提出された（事前審査番号 14-2-899）。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれており、申請地周辺においても埋蔵文化財発掘調査が多く行われてきた地点である。これを受けた埋蔵文化財課では、平成 15 年 3 月 24 日に試掘調査を行い、対象地内において遺構が存在することが明らかになった。このため事業者と埋蔵文化財課で、埋蔵文化財の取り扱いについて協議がなされた。

この結果、事業地内において地下に掘削が及ぶ範囲について、記録保存のための発掘調査を行う合意を得ることができた。しかし埋蔵文化財課が発掘調査に着手する時期と、事業者の工事日程に調整が困難な事態が生じた。そこで民間調査機関である岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室が、㈱レッドキャベツの調査委託を受けて発掘調査を受託することになり、㈱レッドキャベツ、岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室、福岡市教育委員会の三者間で、適正な発掘調査を実施するための協定書が取り交わされた。また、福岡市教育委員会の指導のもと、岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室が発掘調査を行うことになった。発掘調査は平成 15 年 5 月 6 日から開始し、同年 8 月 14 日に終了することができた。整理作業および報告書作成は、調査終了後に行き、平成 16 年 8 月 31 日に報告書を刊行した。

なお、現地で調査を行うにあたり、ご理解と多大な協力をして頂いた事業者関連各位、および指導を賜った諸氏には、ここに記して感謝の意を表したく思います。

池崎謙二・岩下義之・久住猛雄・田上勇一郎・田中壽夫・常松幹雄・長家 伸・塙田正道・吉留秀敏  
山口誠治・山崎純男・米倉秀紀

福岡市教育委員会埋蔵文化財課・福岡市埋蔵文化財センター・㈱レッドキャベツ・㈱流通企画スク  
㈱都市資源開発・㈱友清商店

## 2. 調査体制

事業主体（調査委託）	㈱レッドキャベツ
調査主体	福岡市教育委員会
調査担当（調査受託）	岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室
調査員	塙苑孝志（埋蔵文化財調査室 室長） 中山 浩（埋蔵文化財調査室 研究員） 入江俊之（日本大学人学院博士課程前期 現埋蔵文化財調査室 研究員） 大野直子（埋蔵文化財調査室 研究員） 整理作業のみ 相原正人（埋蔵文化財調査室 研究員） 整理作業のみ
調査作業	加治久佳・菊澤将憲・城戸一郎・倉園真記・黒木三千夫・柴田徳平・城 優太郎 中下まり江・浜 梨里子・古川 満・守屋寛志・安富文雄
整理作業	平野由紀子・佐田祐一・倉園真記・中下まり江・松尾祥子

## II. 遺跡の概要

### 1. 遺跡の立地と環境

比恵遺跡群が所在する福岡平野は博多湾に面し、海浜・砂丘・潟・沖積低地・段丘・丘陵・山地と多様な自然環境を内包している。長い歴史の中では、海岸部における環境の変化が最も著しく、海進・海退や砂丘の形成などが絶えず行われてきた。また内陸部も河川による侵食や堆積作用がみられ、こうした環境の変化が先人の営みを、大きく左右してきたことは言うまでもない。

比恵遺跡群はこの平野のほぼ中央に位置し、北西から流れる御笠川と那珂川に挟まれた台地上にある。基層は花崗岩の風化礫層を基盤とし、その上に粗砂・細砂・シルトが堆積する。さらに上層は阿蘇火砕流による、八女粘土層と鳥栖ロームで形成され、遺構はこのローム面で確認されることになる。標高は5～11m前後を測り、古くは北・東・西側には多くの開析谷が形成され、所謂、八つ手状の景観が望めたものと考えられる。しかし戦前の区画整理や近年の市街地化により、著しく平坦化された現状に往時の面影を見出すことは困難となっている。それでも比恵遺跡群の占めている総体的地形を眺めれば、4kmほど南側の春日丘陵を起点として連なる、緩やかな起伏の延びきった北端にあたることを理解できるはずである。

### 2. 遺跡の歴史的背景

今回で第82次を数えることからも、頻繁に発掘調査が行われてきたことが物語られている。内在する遺跡の時代も旧石器から中世にかけてと幅広く、また遺構及び遺物の密度も高いと言える。

各時代の概略を見ておくと、旧石器時代はナイフ形石器が出土し、縄文時代も土器が出土しているが、いずれも僅少な量である。

しかし弥生時代になると、福岡平野の中心的役割を担っていたことが窺え、急激に密度を増すことになる。その変遷は、まず前期において、台地の北側と西側に集落が出現することにはじまる。中期には集落は、台地全体に広がる様相をみせる。第40・42次調査では、青銅鋳型と取瓶が出土している。さらに57次では板状の鉄製品が発見されており、素材の可能性が指摘されている。こうしたことから、生産活動も行われていたことが推察される。

ここで同時代の遺跡をもう少し視野を広げて探すと、比恵遺跡群の南東には那珂遺跡群が続き、東から入る浅い谷地形を境とし、合わせると約130haの広域にも及ぶ。さらに南側には五十鈴・井尻遺跡群、板付遺跡など他にも多くが続く。また御笠川を挟んだ対岸側にも、雀居遺跡をはじめ複数の遺跡が点在している。春日丘陵まで眼を転じれば、奴国を中心地であり、その権力者を埋葬したと考えられる須玖岡本遺跡や、これを取り巻く多くの遺跡群が知られる。

古墳時代も相変わらず営みは継続していくが、後期になると大型建物群やこれに伴う権が認められ、「那津官家」の可能性が指摘されている。しかしこれ以降においては、那珂遺跡群の方にこうした官衙的機能が移行していくらしく、瓦・磯・貿易陶磁器をはじめ密度の多寡が逆転する傾向が認められる。

以降の中世においては、那珂郡比恵村の地名が認められることより、村落が営まれていたものと思われるが、かつての盛況をそこに見出すことは難しいようである。



1. 比恵道跡群 2. 黒川道跡群 3. 黒川深オサ道跡 4. 松竹道跡 5. 黒川道跡 6. 五十川高木道跡 7. 片貝道跡群 8. 博多巴斯群 9. 黒川道跡群  
10. 黑川道跡群 11. 吉松木町道跡群 12. 筑田城 13. 三毛坂寺 14. 斑多井松坂道跡 15. 日长西町群 16. 黑川道跡群 17. 黑川道跡  
A. 比恵道跡群 第四农用地

Fig.1 比恵道跡群と周辺道路 (1/50,000)

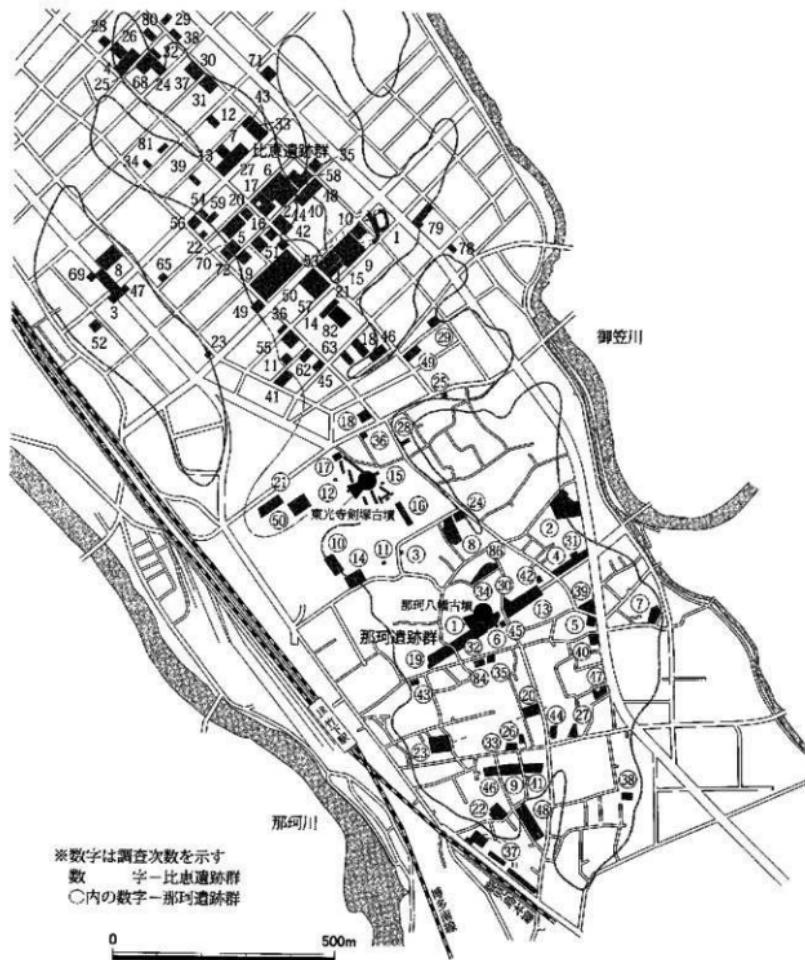


Fig.2 調査X位置図 -1

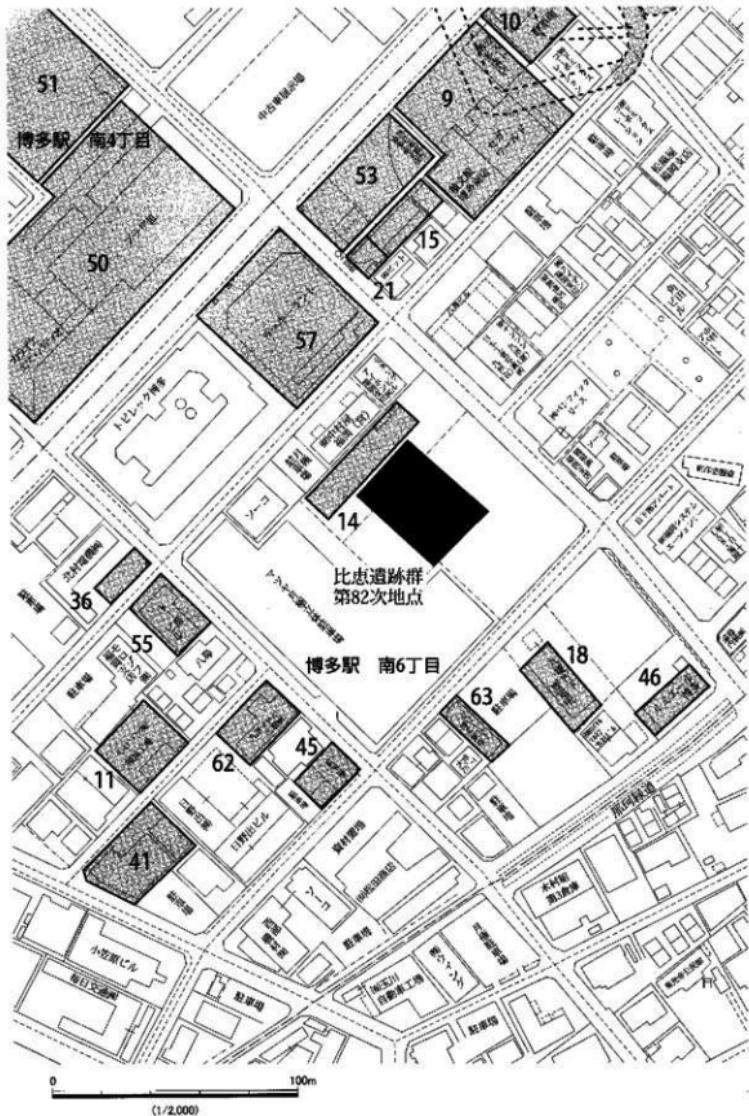


Fig.3 調査区位置図-2

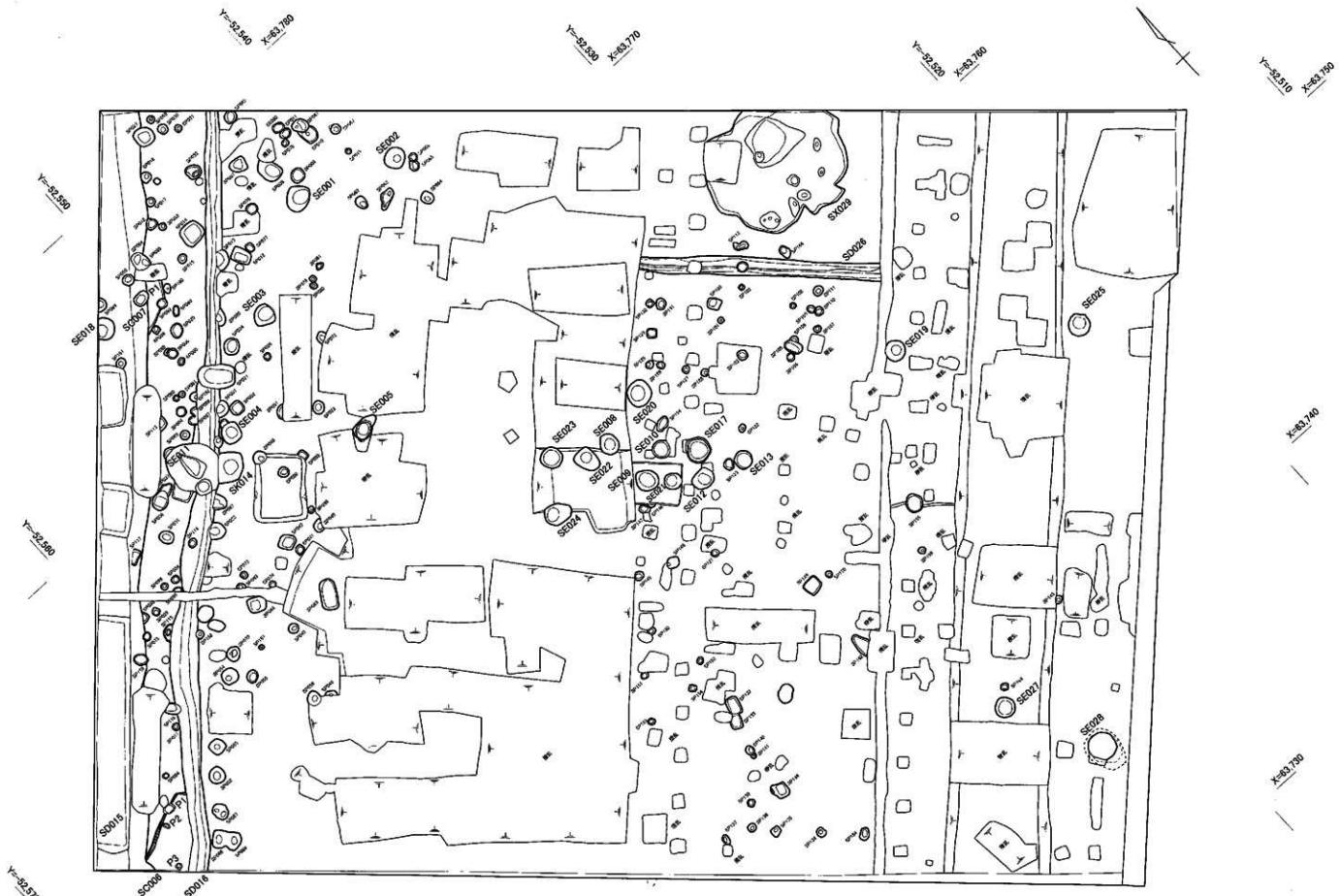


Fig.4. 第82次調査全体図

### III. 発掘調査の記録

#### SE001 井戸跡

掘り込みの平面形態は、長径約1.0m、短径約0.9mを測り、楕円形を呈する。確認面からの深さは約1.1mを測り、壁はやや緩やかに立ち上がる。八女粘土層には確認面から約0.8mの深さで達している。

出土遺物は、中層から下層にかけて弥生土器片、礫等が多数出土している。埋土中から弥生時代後期に属すると考えられる甕の口縁部(001)、さらに下層からは弥生時代後期に属する甕(002)が、ほぼ完全な形で出土している。

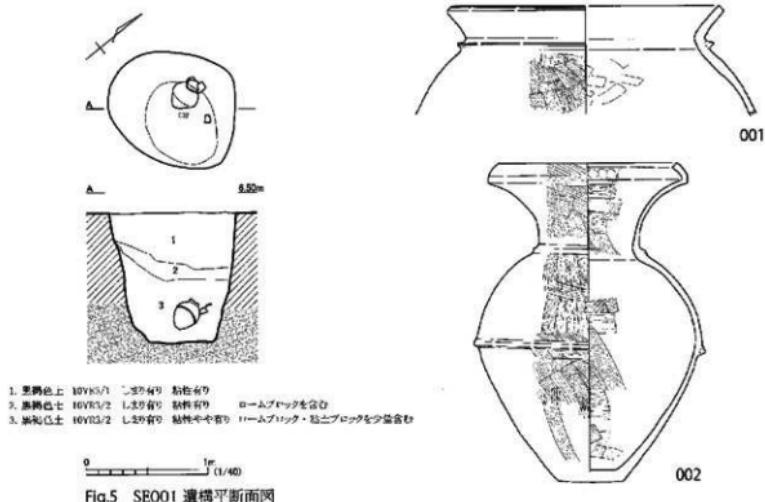


Fig.6 SE001 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	器高			
001	埋土	弥生土器	(32.8)		13.3	にぶい緑 7.5YR6/4	口縁から底部の上部まで平行。底部には突出部がある。外表面はハケなし。内表面はハケ目地。粘土は砂利を含む。	弥生後期
		甕						
002	下層	弥生土器	22.0	7.9	39.4	浅黄緑 7.5YR6/4	口縫から底部を僅かに欠けるが、ほぼ完形の複合土器。底部の付け根と側面に突出部がある。外表面もハケなし。内表面はハケ目地。粘土は砂利を含む。	弥生後期
		甕						

( )内の数値は測定の法値。( )内の数値は埋土部の法値を表す

Tab.1 SE001 出土遺物観察表

## SE002 井戸跡

掘り込みの平面形態は、直径 0.8m を測り、ほぼ円形を呈する。確認面からの深さは約 1.0m を測る。壁は底部に向かうに従って先細りとなり、八女粘土層までは達しない。当遺構は周辺の井戸と比較して、やや小規模で浅いものの、全体の形状からして井戸と考えた。

出土遺物はなく、時代は判然としない。

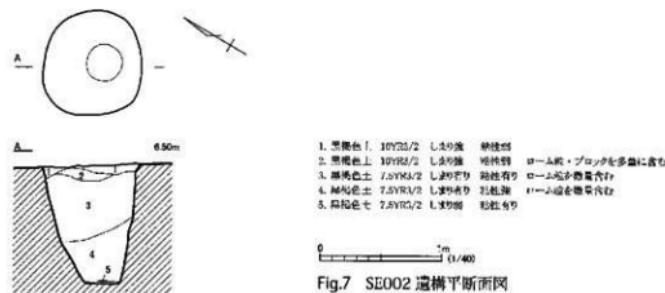


Fig.7 SE002 遺構平面断面図

## SE003 井戸跡

掘り込みの平面形態は、直徑約 0.9m を測り、やや歪な円形を呈する。確認面からの深さは約 1.9m を測る。壁は東壁がややオーバーハンプするのを除いて、ほぼ垂直に立ち上がる。八女粘土層には確認面から約 0.7m の深さで達している。

出土遺物は上層から中層にかけて僅かに出土する。下層からは弥生時代中期末頃に属する土器片と、接合して完形になる赤色顔料を施した壺（024）と、器台（033）が出土する。また大型の甕（019）も接合したところ、腹部下半分が欠損しており、井戸に付設した用途も考えられる。

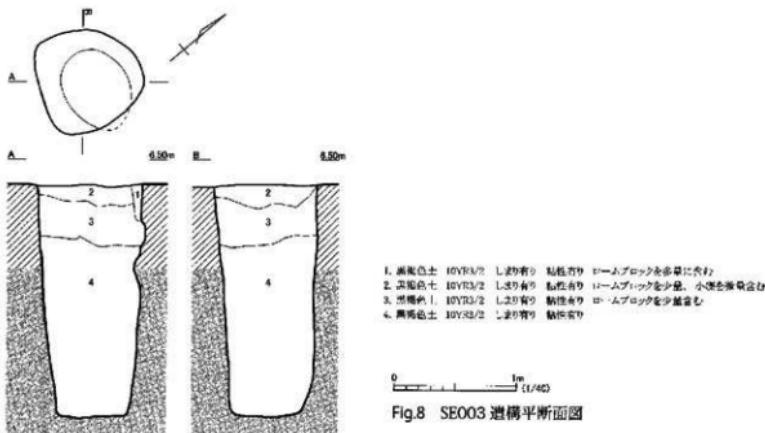
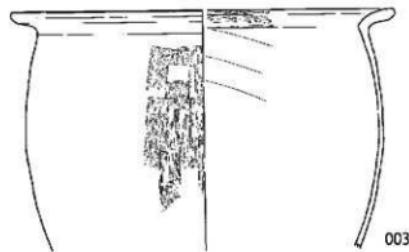
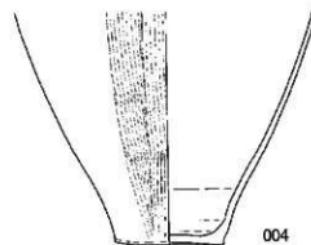


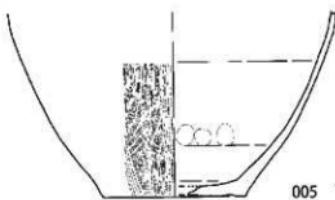
Fig.8 SE003 遺構平面断面図



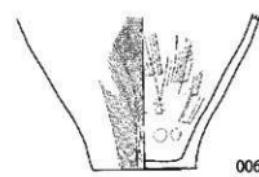
003



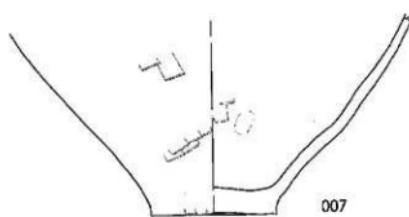
004



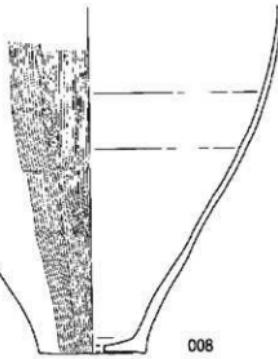
005



006



007



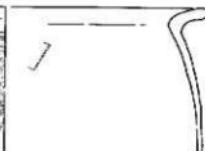
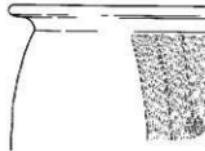
008



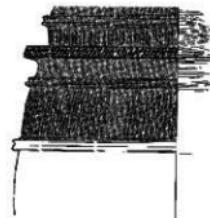
009

0 10cm (1/40)

Fig.9 SE003 出土遺物実測図-1

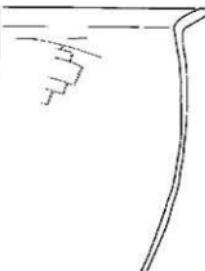
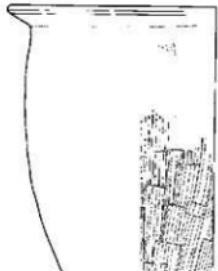


011

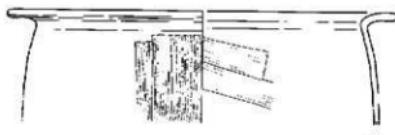


010

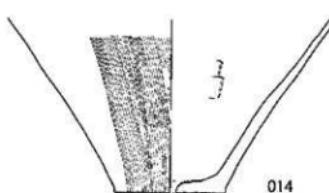
0 10cm  
(この縮尺は010のみ)



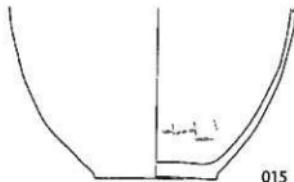
012



013



014



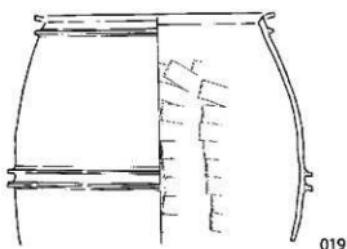
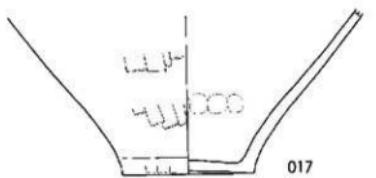
015



016

0 10cm  
(1/4)

Fig.10 SE003 出土遺物実測図 -2



0  
25cm  
(1/10)

(この縮尺は019と020のみ)

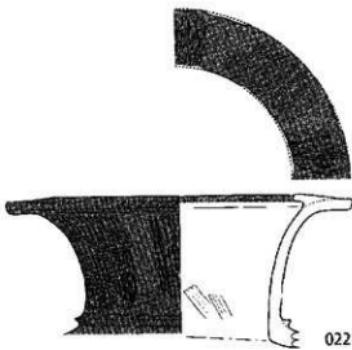
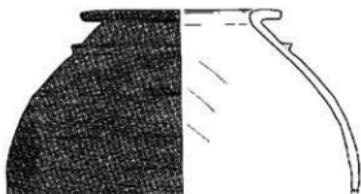
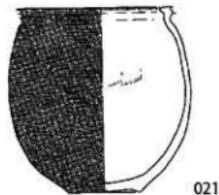
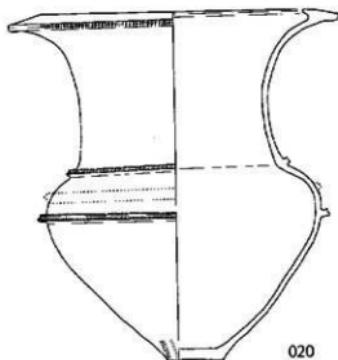
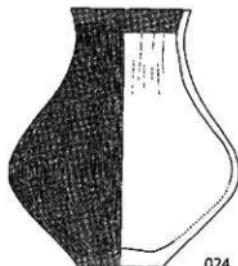
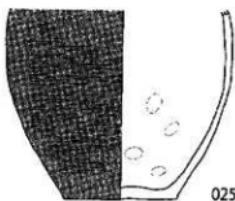


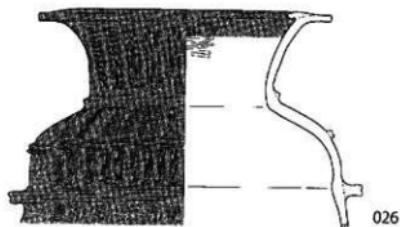
Fig.11 SE003 出土遺物実測図 -3



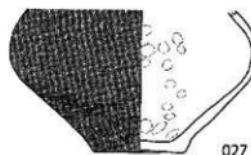
024



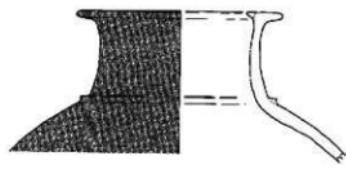
025



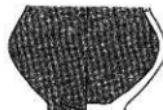
026



027



028



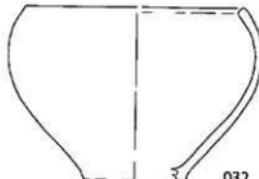
029



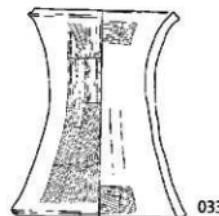
030



031



032



033

0 10cm (1/4)

Fig.12 SE003 出土遺物実測図 -4

遺物番号	層位	器種	法寸 (cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	器高			
003	下層	弥生土器 甕	(31.6)	-	[19.8]	褐 2.5YR6/6	口縁部から底部が現存。外側はハケ目、内側は横方向のヘシ削り。 口縁部はハケ目。	弥生中期
		甕	-	8.9	[19.2]	に赤い褐 7.5YR6/4	底部から底部が強化。外側は横方向のハケ目、内側はナデ。内面底部には擦痕が付着する。	弥生中期
004	下層	弥生土器 甕	-	11.7	[15.2]	褐 7.5YR7/6	口縁部から底部が現存。底部は横方向の穿孔がある。外側はハケ目、内側はナデ。此部分付近に底面剥落が残る。	弥生中期
		甕	-	8.5	[12.5]	に赤い褐 7.5YR6/4	底部から底部が現存。外側はハケ目、内側はハケ目後ナデ。底部付近に底面剥落が残る。	弥生中期
005	下層	弥生土器 甕	-	10.3	[16.0]	に赤い褐 7.5YR6/4	底部から底部が現存。外側はハケ目、内側はハケ目後ナデ。底部付近に底面剥落が残る。	弥生中期
		甕	-	8.8	[28.6]	に赤い赤褐色 5YR5/4	底部から底部が現存。外側はハケ目、内側はナデ。底部中央には成敗後の穿孔がある。	弥生中期
006	下層	弥生土器 甕	-	10.7	[14.1]	に赤い黄褐色 10YR6/4	底部から底部が現存。外側はハケ目、内側は底面附近がナデ。底部中央には成敗後の穿孔がある。	弥生中期
		甕	-	-	[25.8]	明赤褐 2.5YR5/6	底部から底部が現存。外側は底面が横方向のハケ剥離、内側はヘラ削り。口縁部は横ナデ。	弥生中期
007	下層	弥生土器 甕	-	-	[28.6]	に赤い赤褐色 5YR5/4	底部から底部が現存。外側はヘラ削り。内側はヘラ削りとナデ。底部付近に底面剥落が残る。	弥生中期
		甕	-	-	[22.0]	褐 5YR6/8	底部から底部が現存。外側は横方向のハケ剥離、内側はヘラ削り。口縁部は横ナデ。	弥生中期
008	下層	弥生土器 甕	-	-	[22.0]	に赤い赤褐色 5YR5/4	底部から底部が現存。外側はハケ目、内側は底面附近がナデ。底部中央には成敗後の穿孔がある。	弥生中期
		甕	-	-	[22.0]	に赤い黄褐色 10YR6/4	底部から底部が現存。外側はハケ目、内側は底面附近がナデ。底部付近はナデ。	弥生中期
009	下層	弥生土器 甕	-	-	[22.0]	に赤い黄褐色 10YR6/4	底部から底部が現存。外側はハケ目、内側は底面附近がナデ。底部付近はナデ。	弥生中期
		甕	-	-	[22.0]	明赤褐 2.5YR5/6	底部から底部が現存。外側は上部から底下部まで密布され、以下は部分的な付着。外側は横方向のヘラ削りで断面が彫られる。内側はナデで、輪郭線附近に沿って底面が残る。	弥生中期
010	下層	弥生土器 甕	-	-	[22.0]	に赤い黄褐色 10YR6/4	底部から底部が現存。外側は上部から底下部まで密布され、以下は部分的な付着。外側は横方向のヘラ削りで断面が彫られる。内側はナデで、輪郭線附近に沿って底面が残る。	弥生中期
		甕	-	-	[22.0]	明赤褐 2.5YR5/6	底部から底部が現存。外側は上部から底下部まで密布され、以下は部分的な付着。外側は横方向のヘラ削りで断面が彫られる。内側はナデで、輪郭線附近に沿って底面が残る。	弥生中期
011	下層	弥生土器 甕	(33.2)	-	[12.0]	褐 5YR6/8	底部から底部が現存。外側は横方向のハケ剥離、内側はヘラ削り。口縁部は横ナデ。	弥生中期
		甕	-	-	[22.0]	に赤い赤褐色 5YR5/4	外側は削離しているが、ハケ目が強められ、口縁部付近は横ナデ。内側は上部はヘラ削りが施されるが、下位は底部のみ不規則。	弥生中期
012	下層	弥生土器 甕	(34.2)	-	[22.0]	に赤い赤褐色 5YR5/4	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
		甕	-	-	[22.0]	に赤い赤褐色 5YR5/4	外側は削離しているが、ハケ目が強められ、口縁部付近は横ナデ。内側は上部はヘラ削りが施されるが、下位は底部のみ不規則。	弥生中期
013	下層	弥生土器 甕	(31.8)	-	[9.2]	に赤い赤褐色 10YR7/2	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
		甕	-	-	[9.2]	に赤い赤褐色 10YR7/2	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
014	下層	弥生土器 甕	-	(9.0)	[14.3]	に赤い赤褐色 10YR7/2	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
		甕	-	-	[14.3]	に赤い赤褐色 10YR6/4	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
015	下層	弥生土器 甕	-	9.9	[14.0]	に赤い赤褐色 10YR6/4	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
		甕	-	-	[14.0]	に赤い赤褐色 10YR6/4	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
016	下層	弥生土器 甕	-	-	[10.8]	に赤い赤褐色 2.5YR5/4	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
		甕	-	-	[10.8]	に赤い赤褐色 2.5YR5/4	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
017	中層	弥生土器 甕	-	10.9	[13.0]	褐 7.5YR5/6	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
		甕	-	-	[13.0]	に赤い赤褐色 7.5YR6/4	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
018	下層	弥生土器 甕	-	11.0	[11.3]	に赤い赤褐色 7.5YR6/4	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期
		甕	-	-	[11.3]	に赤い赤褐色 7.5YR6/4	底部付近のみ現存。外側は横方向のハケ目、内側は横方向のハケ目後ナデ。	弥生中期

( ) 内の数値は推定の法寸。( ) 内の数値は底面の法寸を表す

Tab2. SE003 出土遺物観察表-1

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底深	高さ			
019	下層	弥生土器 壺	—	—	(46.6)	橙 7.5YR6/6	人字型の口縁部付近から凹部のみ残存。穴部が3箇所ある。外側は肥厚が著しく、底盤は不規則。内面はハケ口が施される。胎土は粗粒を含む。	弥生中期
		弥生土器 壺	67.8	11.5	71.9	にぶい橙 7.5YR7/4	大型の壺。口縁部は底部を削り、丸壺に目を施す。腹部の付け根と底部に削り、肩部には突起の痕が残る。内外面とも削痕ナデ、外面部底付近はハケ口。	弥生中期
021	下層	弥生土器 壺	—	5.9	15.2	赤褐 5YR4/6	赤色顔料を投注した壺。全面に焼きが施されていたと思われるが、摩擦が著しいため不規則。内面はヘラ削り後、ナデ。	弥生中期
		赤	—	—	—	—	赤色顔料を投注した壺。全面に焼きが施された。	弥生中期
022	下層	弥生土器 壺	(28.4)	—	[11.3]	明赤褐 5YR5/6	赤色顔料を投注した壺。口縁部から底盤まで焼か。口縁部は輪状を呈し、目口を施す。底部の付け根には突起が3箇所ある。外面部底付近に削り跡が残ったのか、ヘラ削りと工具削が混在している。口縁部・底部は放物状に焼きが施される。内面は削痕はヘラ削き、底部はハケ口。胎土は粗粒なナデ。胎土は粗い砂粒を含む。	弥生中期
		壺	(16.6)	—	[15.2]	赤褐 2.5YR4/8	赤色顔料を投注した壺。頭部は丸みを呈し、腹部付け根に三角突起が3箇所ある。底部は放物状に焼きが施される。内面は削痕はヘラ削き、底部はハケ口で焼きが残る。	弥生中期
024	下層	弥生土器 壺	(9.8)	6.8	21.3	赤褐 2.5YR4/8	赤色顔料を投注した壺。口縁部の内面に削痕が施される。外側は全面にナラ擦で、増点が施される。内面はナデ、底部に近づくほど削痕が残る。	弥生中期
		吸	—	—	—	明赤褐 2.5YR5/6	赤色顔料を投注した壺。底部より内面まで焼かれており、口縁部には焼痕が残る。内面はナラ擦で、僅かに指圧痕が残る。	弥生中期
026	下層	弥生土器 壺	—	9.3	[15.6]	赤褐色 2.5YR4/8	口縁部より底部まで焼か。口縁部は輪状を呈す。腹部の付け根に三角突起、肩と肩間にM字形の削痕がある。外側はヘラ焼き、口縁部・底部付近は削痕ナデ。内面は口縁部辺はヘラ削きが施され、底部以下は削痕ナデであり、不規則。	弥生中期
		壺	23.9	—	[17.7]	赤褐色 2.5YR4/8	口縁部より底部まで焼か。口縁部は輪状を呈す。腹部の付け根に三角突起、肩と肩間にM字形の削痕がある。外側はヘラ焼き、口縁部・底部付近は削痕ナデ。内面は口縁部辺はヘラ削きが施され、底部以下は削痕ナデであり、不規則。	弥生中期
027	下層	弥生土器 壺	—	7.4	[11.7]	明赤褐 2.5YR5/8	赤色顔料を投注した壺。外側は横方向へのラセン巻き、底盤付近は縱方向。内面はナデで、指圧痕、穴痕が複数に残る。	弥生中期
		壺	—	—	—	—	赤色顔料を投注した壺。外側は横方向へのラセン巻き、底盤付近は縱方向。内面はナデで、指圧痕、穴痕が複数に残る。	弥生中期
028	下層	弥生土器 壺	(7.4)	—	[11.7]	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁部から脚部の一部まで残る。底盤を含めて内外面とも赤色顔料を施す。外側はやや不規則だが、底盤付近にはヘラ削りが見られる。内面はナデ。胎土は粗い砂粒を含む。	弥生中期
		壺	—	—	—	—	赤色顔料を投注した壺の断片のみ残る。削痕突起が残る。突起より上部はヘラ削き、突起以下は磨痕のため不規則。内面はヘラ削りで、部分的に赤色顔料の付着が見られる。	弥生中期
030	下層	弥生土器 壺	—	—	—	赤褐 5YR4/6	赤色顔料を投注した壺の断片のみ残る。削痕突起が残る。突起より上部はヘラ削き、突起以下は磨痕のため不規則。内面はヘラ削りで、部分的に赤色顔料の付着が見られる。	弥生中期
		壺	—	—	—	—	赤色顔料を投注した壺の断片のみ残る。削痕突起が残る。突起より上部はヘラ削き、突起以下は磨痕のため不規則。内面はヘラ削りで、部分的に赤色顔料の付着が見られる。	弥生中期
031	下層	弥生土器 壺	(9.3)	—	[9.6]	赤褐 5YR4/6	赤色顔料を投注した壺の断片のみ残る。削痕突起が残る。突起より上部はヘラ削き、突起以下は磨痕のため不規則。内面はヘラ削りで、部分的に赤色顔料の付着が見られる。	弥生中期
		壺	—	—	—	—	赤色顔料を投注した壺の断片のみ残る。削痕突起が残る。突起より上部はヘラ削き、突起以下は磨痕のため不規則。内面はヘラ削りで、部分的に赤色顔料の付着が見られる。	弥生中期
032	下層	弥生土器 鉢	(17.9)	8.3	14.3	にぶい黄褐 10YR7/4	外側は焼過しておらず不明確だが、内面は共通共にナデと思われる。外側は内面焼している。	弥生中期
		鉢	—	—	—	—	外側は焼過方向のハケ口、内面は口縁部、底盤付近は横方向のハケ口。内面はナデ。	弥生中期
033	下層	弥生土器 蓋台	12.2	14.1	17.1	にぶい黄褐 10YR7/3	( )内の数値は推定の法量、( )内の数値は既存物の法量を表す	弥生中期

Tab3. SE003 H1土遺物観察表 -2

## SE004 井戸跡

平面形態は直径約0.8mを測り、ほぼ円形を呈する。確認面からの深さは約1.9mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。八女粘土層には確認面から約0.7mの深さで達している。当遺構の北側に小穴との切り合いが確認されるが、新旧関係は明確にし得なかった。

出土遺物は埋土中から弥生土器片がわずかに出土しており、底部付近では弥生時代後期に属する壺が(034)、完形で出土している。

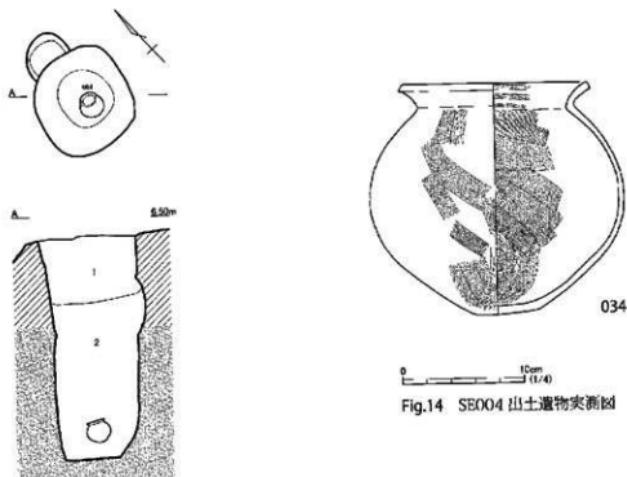


Fig.14 SE004 出土遺物実測図

1. 黒褐色土: 10YR3/2 しまり有り 滲性有り ロームゾックを含む。小便を混在含む
2. 黑褐色土: 10YR3/2 しまり有り 滲性有り 小便を混在含む



Fig.13 SE004 遺構平断面図

遺物番号	層位	器種	法寸(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	高さ			
034	下層	弥生土器	15.7	5.3	19.05	橙 7.5YR6/6	完形だが、口縁部を深くに欠損する。(1)縁部は崩れりが行なわれ、多くの穴状に削れて縁やかなに欠損する。底部は平底。外表面は磨滅しているが、内表面は内外両ともハケ付が常に、L面部分は鏡ナギ。底七には刷毛と青苔が残る。	弥生後期
		壺						

( )内の数値は推定の数値。( )内の数値は残存部の法寸を表す

Tab4. SE004 出土遺物観察表

## SE005 井戸跡

確認時は、周囲も含め擾乱で破壊されていたが、正な椭円形を呈するのが確認できた。規模は長径約1.2m、短径約0.7mを測り、確認面からの深さは約1.4mを測る。壁は東壁が緩やかに立ち上がるのを除いては、ほぼ垂直に立ち上がる。八女粘土層には確認面から約0.9mの深さで達しており、西壁の一部には粘土の崩落の跡がある。底面は丸みを帯びている。

出土遺物は全層から須恵器、土師器片、礫等が多数出土しており、底部付近では古墳時代後期に属する完形の丸底の壺が、2点(036・037)並んだような状態で出土している。

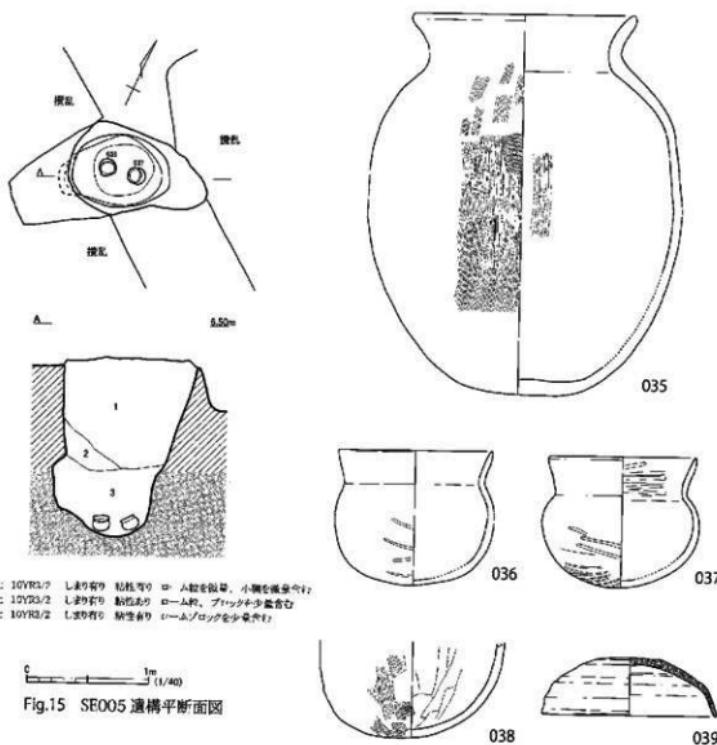


Fig.15 SE005 造構平断面図

Fig.16 SE005 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	器高			
035	埋土 一括	土師器 壺	18.4	—	31.3	に赤い黄緑 10YR7/3	一部欠損するが、ほぼ方形の丸底の壺。口縁部は外反する。外縁は摩滅しているが、ハク自が施される。内側も摩滅が著しいが、ハク11番確認できる。底部付近は底部付近が残る。	古墳後期
036	下層	土師器 壺	12.6	—	11.1	橙 2.5YR7/8	小型の丸底壺。口縁部が部分的に欠損する。全体的に摩滅しているが、僅かに磨きの痕が確認できる。底上は細かい砂粒を含む。	古墳後期
037	下層	土師器 壺	12.2	—	10.8	相 2.5YR6/8	小形の丸底壺。口縁部が部分的に欠損する。全体的に摩滅しているが、僅かに磨きの痕が確認できる。底上は細かい砂粒を含む。	古墳後期
038	下層	土師器 壺	—	—	(8.0)	赤 10R5/6	丸底の壺。開口下から底辺まで残存、外縁はハク目、内側はハク削りが施される。底上は若い砂粒を含む。	古墳後期
039	下層	土師器 壺	14.3	4.9	4.0	灰 5Y5/2	底部は回転しつらりと施される。底上は砂粒を含む。	古墳後期

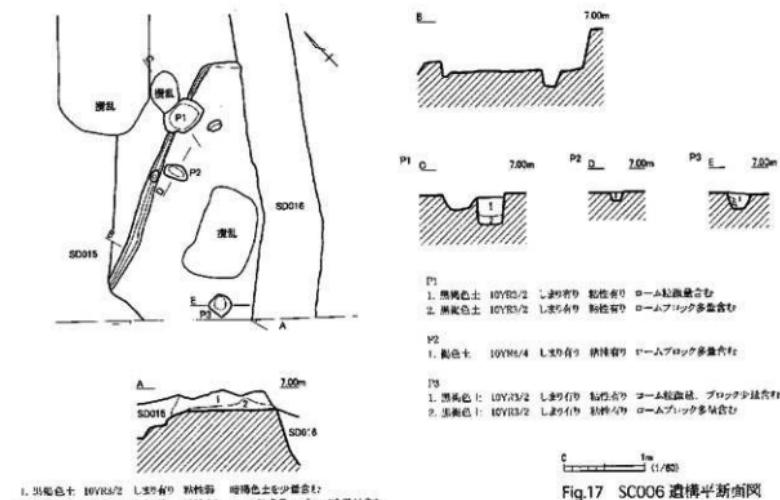
( ) 内の数値は推定の法量、( ) 内の数値は保存率の法量を表す

Tab5. SE005 出土遺物観察表

### SC006 壇穴式住居跡

北西側はSD015、南東側はSD016と2条の溝によって破壊されている。また、南側は調査区外へ延びることが推測される。そのため平面形態、規模は不明であるが、北東隅のコーナーが検出されていることから、方形を呈していたのではないかと推測される。確認面からの深さは約0.1mを測る。床面は全体的に硬化しており、北壁に沿って周溝が検出された。住居内には小穴が3基検出されたが、そのうち1基は周溝を破壊しており、住居に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物は弥生土器の小破片が多いが、床面からは弥生時代後期に属する壺の底部が1点(040)出土している。



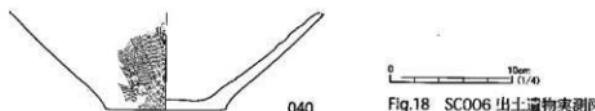


Fig.18 SC006 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	耕高			
040	床面	弥生土器 甕	—	10.0	(8.0)	橙 SYR6/8	底の底盤のみ残る。下底。外周はハケ土が施される。内面は灰褐色が著しく調査値は小判。底土は赤い砂粒を多く含む。	不明

( )内の数値は推定の法量。〔 〕内の数値は複数個の法量を表す

Tab6. SC006 出土遺物観察表

### SC007 積穴式住居跡

北西側は SD015 に、北東側は擾乱に破壊されており、竪穴式住居跡の南東部のみ検出された。規模は不明だが、南東壁が弧状を呈しているのが確認できたため、平面形態は円形に近い形状を呈していたのではないかと推測される。確認面からの深さは約 0.1m を測り、床面は硬化している。住居内には小穴が 1 基検出されたが、柱痕等は確認できず、住居に伴うものであったかどうかは明確にし得なかった。

川土遺物は弥生土器、須恵器の小破片、黒曜石等が出土しており、また住居内の小穴からも多数の小破片が出土しているが、SD015 からの混入も考えられる。

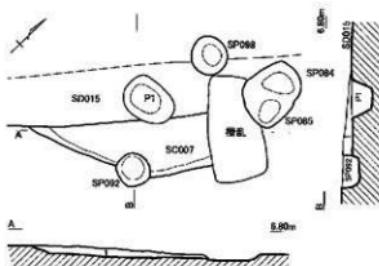


Fig.19 SC007 造構平衡面図

## SE008 井戸跡

確認面は削平を受けているが、平面形態は梢円形を呈し、長径約0.9m、短径約0.7mを測る。確認面からの深さは約2.4mを測り、八女粘土層には約2.1mの深さで達している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

出土遺物の点数は少ないが、底部付近からは弥生時代後期に属する壺が(041)出土している。

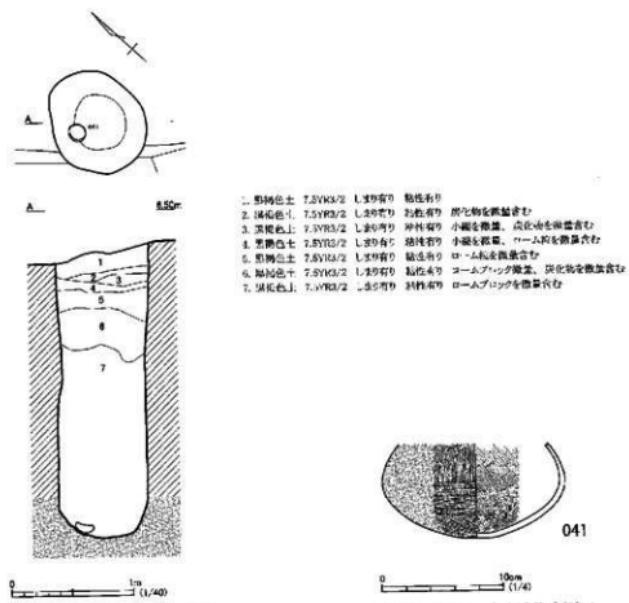


Fig.20 SE008 墓構断面図

Fig.21 SE008 山土遺物実測図

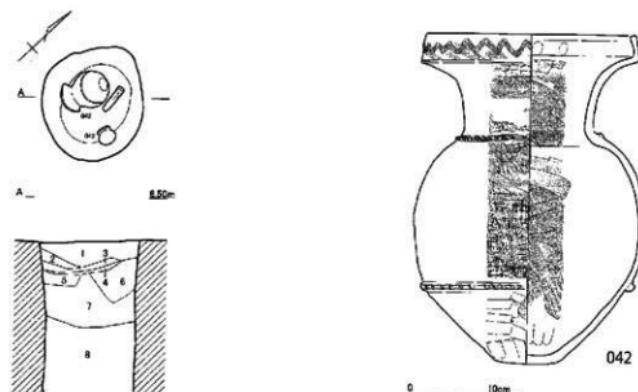
遺物番号	層位	基種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口徑	底径	高さ			
			—	3.1	(7.8)			
041	下層	余生土層	灰黃褐 10YR5/2	表面から底部にかけて残存、底部はわずかに下伏となる。外側 は灰褐色剥離が発現され、剥離の質も細らむ部分は微弱的にそれ以外は 堅方向に差異が確認できる。内部のハケ部は基準から外側に放射状 隙に沿われる。	弥生後期			
		壺					( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は操作部の法量を表す	

Tab7. SE008 出土遺物観察表

## SE009 井戸跡

掘り込みの平面形態は長径約1.0m、短径約0.9mを測り、ほぼ楕円形を呈する。確認面からの深さは約2.6mを測る。八女粘土層には約2.2mの深さで達している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

出土遺物の点数は少ないが、下層から弥生土器片、木片が數点出土している。底部付近からは弥生時代後期に属する、完全な形をした複合口縁壺(042)と袋状口縁壺(043)が出土している。



1. 暗褐色土 7.5YR3/2 こぼれ有り 内透有り ローム/ロック少含む
2. 黒褐色土 7.5YR3/1 しまか有り 粘性有り ローム/ロック多含む
3. 黑褐色土 7.5YR5/1 しまか有り 粘性有り ローム/ロック少含む
4. 黑褐色土 7.5YR5/2 しまか有り 亜透有り 硬化物微量含む
5. 黑褐色土 7.5YR5/1 こぼれ有り 病害有り ローム/ロック少含む
6. 黑褐色土 7.5YR5/1 しまか有り 病害有り ローム/ロック少含む
7. 黑褐色土 7.5YR5/1 しまか有り 病害有り ローム/ロック少含む
8. 黑褐色土 + 7.5YR3/1 しまか有り 粘性有り ローム/ロック少含む

Fig.22 SE009 遺構断面図  
(1/40)

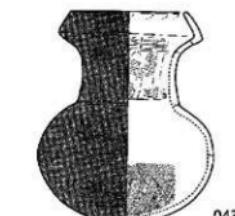


Fig.23 SE009 出土遺物実測図  
(1/40)

遺物番号	着位	器種	法観(cm)			色調	特 質	時 期
			口径	底径	高さ			
042	下層	弥生土器	25.7	8.3	40.25	灰黄褐色 10YR5/2	複合1型底。瓶頸の付け根と脚部に瓶み口を持つ突起が1ヶ所づつ ある。外周断面はタク半円、ハケ半円、瓶底付近はハケ11。ヘラ削り が施される。底部はハゲ目で削られる。内面は白口研磨。瓶底付近がケグ、他のハゲ目が削 される。腹上は絞り、縦筋をやや多く含む。	弥生後期
		壺						
043	下層	弥生土器	9.6	—	17.4	明赤褐色 2.5YR5/8	1.瓶底の一部を欠き、瓶頸の一部が剥離するが、ほぼ完形の体形に 帰属。表面は削離しているが、赤色研磨が施されている。外周はハ ケ目削り、算引きが施される。内面はハゲ目で、瓶底はオーバードリルした後のハ ケ目削りが施される。口縁部は研ナメで、底の底が残る。底土は精良で、金剛丹が含まれる。	弥生後期
		壺						
044	下層	弥生土器	—	—	(7.3)	灰黄 2.5Y7/2	側下部のみ残存。底部は丸底。外側はハウ目後、底辺、内側はハケ 目が施される。底土は精良で、金剛丹が含まれる。	弥生後期

( ) 内の数値は推定の法観、( ) 后の数値は残存部の法観を表す

Tab8. SF009 出土遺物観察表

### SE010 井-i跡

西側と東側が擾乱に破壊されているが、平面形態はほぼ円形を呈し、直径約0.7mを測る。確認面からの深さは約1.7mを測る。八女粘土層には達しておらず、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦となっている。

出土遺物は弥生時代後期に属する壺と壺が出土しており、底部付近からは完全な形をした壺(046・047・049・052)と破片が集中して出土している。

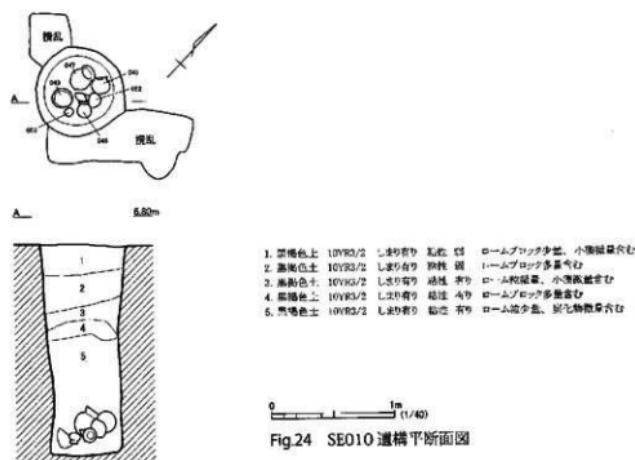


Fig.24 SE010 道構断面図

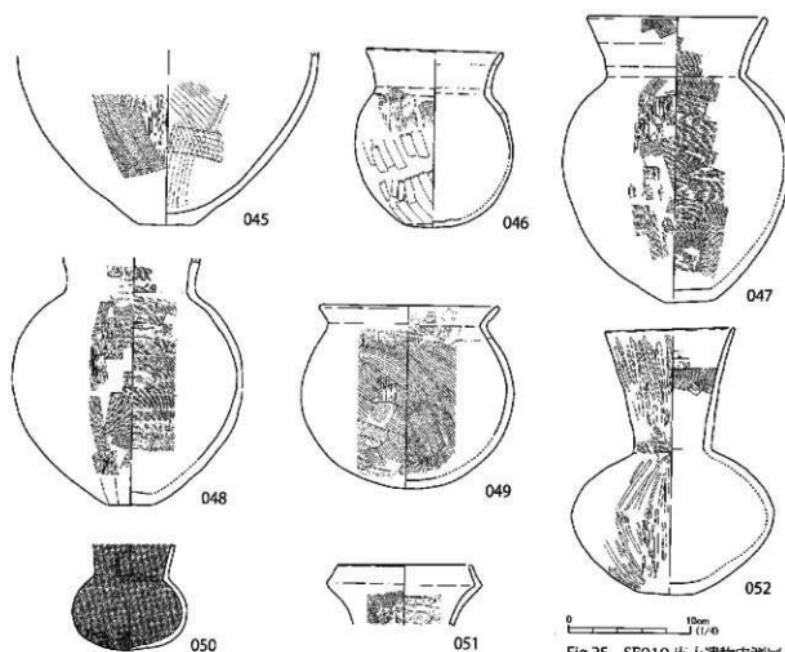


Fig.25 SE010 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	高さ			
045	下層	弥生土器 盤		4.6	(14.4)	浅黄緑 7.5YR8/4	裏の脚部下部から発達が現れる。外表面は平滑。外縁はハケ目が跡附れ。内面は粗いハケ目が施される。底土には粗い砂粒が含まれる。	弥生後期
046	下層	弥生土器 盤	11.3	4.8	14.8	灰黄 2.5Y7/2	先端の小突きの底盤は壁があり、平底に近いが、丸みを帯びる。脚部下部はハケ目、上半はハケ目、内面はナデ。口縁部に擦ナデ。底土は砂粒を多量に含む。	弥生後期
047	下層	弥生土器 盤	14.8	3.9	23.5	浅黄緑 7.5YR8/6	口縁を一部欠くが、ほぼ完形。底盤は平底。内側部はくさ状に折れると、内外面ともハケ目。口縁部附近はハケ目。底土は砂粒を多く含む。	弥生後期
048	下層	弥生土器 盤	—	4.0	(20.4)	浅黄緑 7.5YR8/6	底盤は平底。口縁部はやや急に立ち上がる。内外面ともハケ目が施され、内面底部附近はナデ。外側の一部に擦の付着あり。	弥生後期
049	下層	弥生土器 盤	14.8	—	15.1	浅黄緑 7.5YR8/4	滑らかな底盤。内外面ともハケ目が施されるが、底部内面に擦ナデが残り。口縁部は擦ナデ。底土は砂粒を含む。	弥生後期
050	下層	弥生土器 盤	—	—	(8.8)	明るい青 2.5YR5/6	口縁部を除いて滑らか。底盤は丸底。内外面とも全カ赤色顔料を塗布。頭部と底盤附近にハケ目が施され、擦痕、剥離上半に着きが施される。底土は細かい砂粒を含む。	弥生後期
051	下層	弥生土器 盤	11.0	—	(5.0)	灰白 2.5Y8/2	袋状口縁部の口縁部のみ現存。口縁部は外面に擦痕が認められる。頭部は内外面ともハケ目。口縁部は擦ナデ。	弥生後期
C52	下層	弥生土器 盤	10.6	4.8	22.1	にごい青 7.5YR6/4	ほぼ完形の底盤。外縁はハケ目後、へつ柄が施されるが、擦痕、剥離などにハケ目が残る。内面底部はハケ目。口縁部付近は擦ナデ。底土は確かに赤色顔料が含まれる。	弥生後期

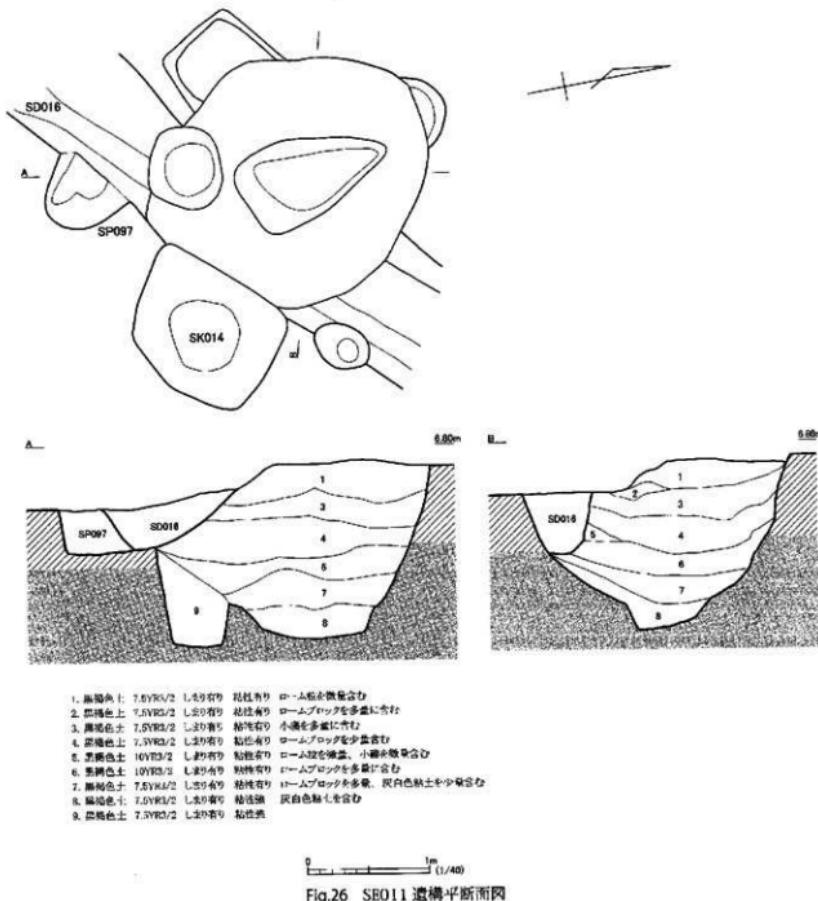
( )内の数値は絶対的法量、( )内の数値は現存部の法量を表す

Tab9. SE010 出土遺物観察表

## SEO11 井戸跡

南側を SK014、SD016 に切られ、西側を擾乱に破壊されているが、残存形態からほぼ橢円形だつたと推測される。確認された規模は長径約 2.4m、短径約 2.0m を測る。確認面からの深さは約 1.5m を測る。八女粘土層には約 0.6m の深さで達している。壁は全体的に緩やかだが、深さ約 1.2m 辺りで急に落ち込んでいる。

出土遺物は埋土全体から弥生土器、古式土器師、須恵器、石製品等が破片で多数出土している。周辺の井戸と異なり、布留系や庄内系と考えられる外來系の土器（053～062）が多数出土している。



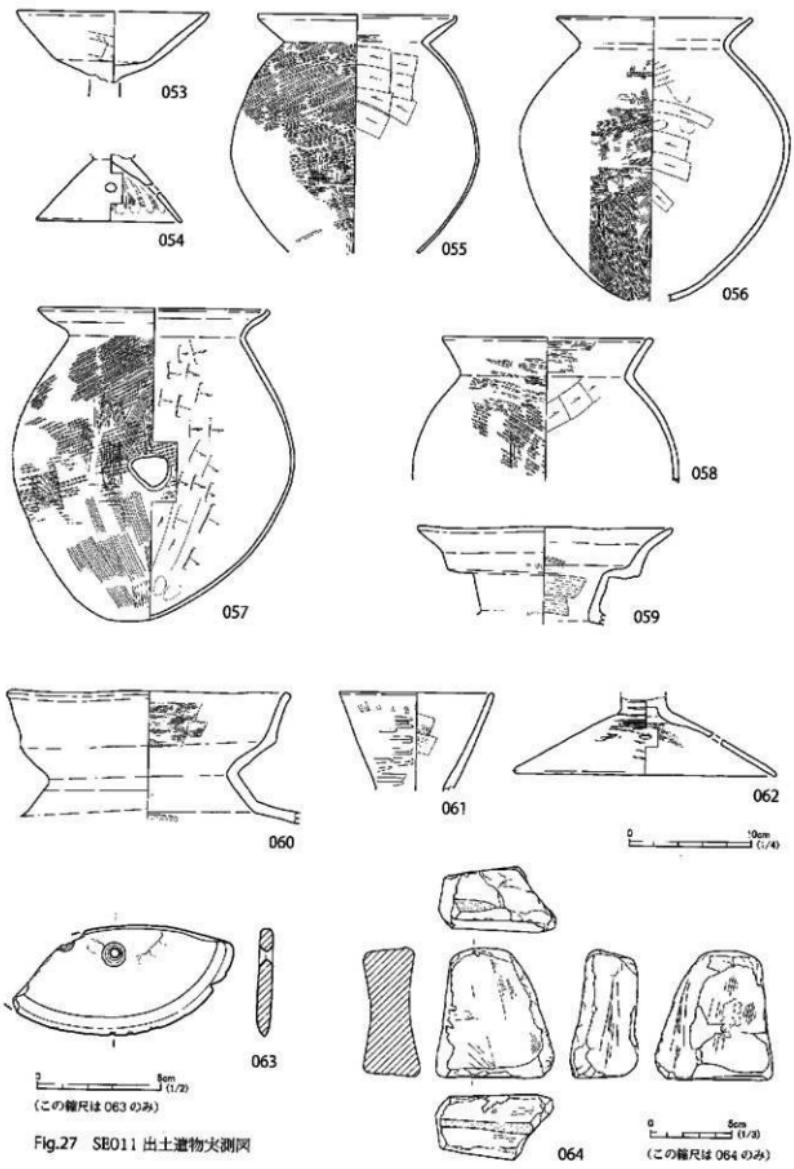


Fig.27 SB011 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	高さ			
053	上層	土師器 壺	(15.5)	-	(5.85)	浅黄橙 7.5YR8/3	環部のみ残存。ハケ目が確認できるが、岸壁が著しく、不明確。胎土は砂粒を含む。	古墳前期
		高环						
054	下層	土師器 壺	-	11.8	(5.5)	橙 5YK7/6	頂部のみ残存。透かし窓は1箇所確認できる。外側は擦ナデ、内面はハケ目後ナデ。一部に水色顔料が見られるが、摩滅のため、範囲は不明。	古墳前期
		高环						
055	下層	土師器 壺	(16.3)	-	(19.6)	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部少しだけ小さく上につまり上げられる。外側側面上下は叩き、下には叩き後ハケ目、内面はヘラ削りが施される。	古墳前期
		甕						
056	下層	土師器 甕	(15.6)	-	23.3	にぶい黄橙 10YR7/3	外側はハケ目、口縁部は擦ナデ。内面はヘラ削りで、部分的に赤面が現れる。胎土には砂粒が多く、確かに全凹は含まれる。	古墳前期
		壺						
057	下層	土師器 甕	(19.0)	-	25.8	にぶい黄橙 10YR7/2	丸底で、半円内側で、頂部に空孔がある。苏打は叩き、(5.5)トドナダ。内面はヘラ削りで、部分的に赤面が現れる。胎土には砂粒が多く、確かに全凹は含まれる。	古墳前期
		壺						
058	上層	土師器 甕	(17.0)	-	(11.8)	橙 5YR7/6	外側は叩きで、一部ハケ目が確認できる。内面はヘラ削りが施される。胎土は細い砂粒を含む。	古墳前期
		壺						
059	下層	土師器 甕	20.9	-	(6.3)	褐 7.5YR7/6	口縁部の口縁部のみ残存。外側は摩擦が著しいが、ハケ目が施される。布留系と思われる。	古墳前期
		壺						
060	上層	土師器 甕	23.2	-	(10.5)	浅黄橙 10YR8/4	口縁部のみ残存。外側はナデ、内面はハケ目が施される。胎土に砂粒を含む。	古墳前期
		壺						
061	上層 下層	土師器 甕	12.6	-	(8.1)	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁部の口縁部から底部、外側は擦方向の擦まで(前代近はハケ目が施される。内面はヘラ削りが施される。	古墳前期
		壺						
062	下層	土師器 高环	-	21.5	(6.4)	橙 5YR7/1	頂部のみ残存。空孔は3箇所確認できる。外側は擦方向のヘラ削りだが、腹の瘤部付近はナデ。内面はハケ目が施される。	古墳前期
		高环						
063	下層	石製品 石底丁	(9.0)	4.5	0.6		小孔は本来2箇所あったと思われるが、欠損したために1箇所の状態で再利用していたものと想えられる。	
		石製品 石底丁						
064	上層	石製品 砥石	8.0	(7.2)	4.0		表面を丸むと中央部が削り落としている。最も小さい面とその対面には溝り減った浅い溝が見られる。	
		砥石						

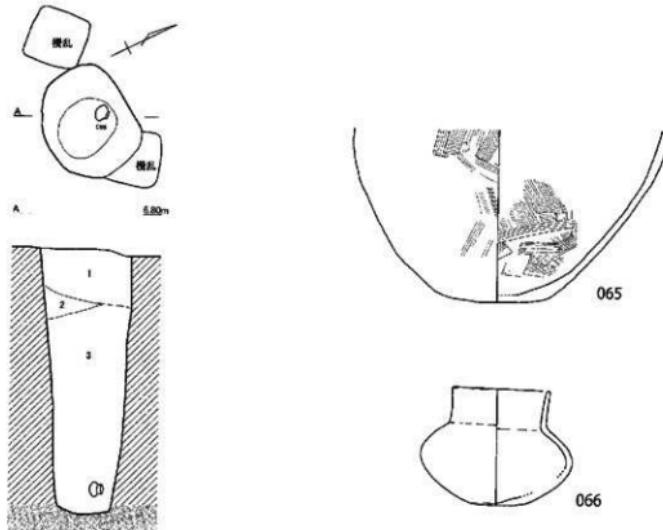
( ) 内の数値は推定の法軸。〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab10. SEO11 出土遺物観察表

## SEO12 片戸跡

東側と西側を攪乱に破壊されているが、平面形態はほぼ梢円形を呈し、長径約 0.9m、短径約 0.7m を測る。確認面からの深さは約 2.2m を測り、八女粘土層には約 2.1m の深さで達している。壁は底部に向かうに従って先細りとなる。

出土遺物の点数は少ないが、下層から弥生時代後期に属する完全な形をした小型の直口甕(066)が、出土している。



L. 黒褐色土 10Y9/1 しまりあり 軟性有り ローム状発達、小底部粗、灰化物を含む  
 2. 黄褐色土 10Y6/1 しまり有り 軟性有り ローム状発達、小底部粗  
 3. 黑褐色土 10Y3/1 しまり有り 軟性有り ローム状発達、灰化物を含む

0 1m (1/40)

Fig.28 SEO12 遺構平衡面図

0 1cm (1/40)  
Fig.29 SEO12 出土遺物実測図

遺物番号	層位	断面	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	器高			
065	下層	弥生土器	-	8.5	14.2	灰白 5Y7/1	断面下半から底部にかけて複数の底部丸みを有する。内外表面にハケ目が施される。底土に砂粒を含む。	弥生後期
		甕						
066	下層	弥生土器	8.1	4.5	97.5	灰白 10Y8/1	ほぼ丸形の窓口の小底部、断面が吸出し、小さな底部がある。内外ともナデ。底土は砂粒を多量に含む。	弥生後期
		甕						

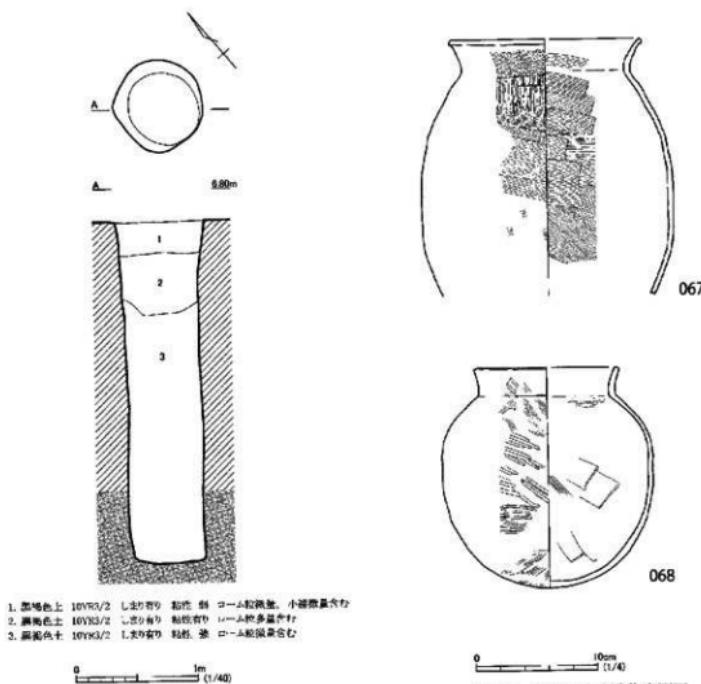
( ) 内の数値は測定の法量、( ) 内の数値は残存部の法量を表す

Tab11. SEO12 出土遺物観察表

### SE013 井戸跡

平面形態は円形を呈し、直径約0.7mを測る。確認面からの深さは約2.8mを測り、八女粘土層には約2.2mの深さで達している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物は下層から弥生時代後期に属する壺(067)と甕(068)の破片が出上している。



遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	器高			
067	下層	弥生土器	(15.8)	—	(21.1)	にぶい相 7.5YR 7/4	縁の内側から口縁部にかけてハケ、口縁部は外反する。外曲面はハケ目が施され、口縁部付近は施ハケ後、焼ナデ。内面は施土は砂粒を多量に含む。	弥生後期
		甕						
068	下層	弥生土器	(11.2)	—	18.1	にぶい相 5YR5/4	丸底の池、口縁は直線に近いが、やや外反する。外曲面は腰部から底部にかけてハケ目が施され、腰部は焼成ハケ目が施される。内面はハケ削りで、口縁下には施土がハケ目が施され、口縁部は焼ナデ。	弥生後期
		甕						

( ) 内の数値は推定の法量。( - ) 内の数値は残存部の法量を表す

Tab12. SE013 出土遺物観察表

## SK014 七坑

確認面は擾乱に破壊され、北西側は SD016 に破壊される。平面形態は方形を呈し、長辺約 1.2m、短辺約 1.0 m を測る。確認面からの深さは約 0.9m を測り、八女粘土層には約 0.8m の深さで達している。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

出土遺物は弥生七器の小破片が多数を占め、この他には石庖丁（069）が 1 点出土している。

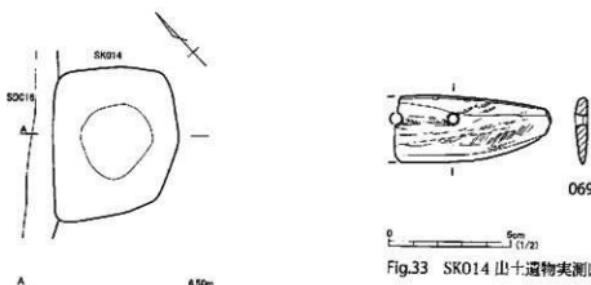
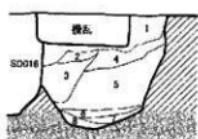


Fig.33 SK014 出土遺物実測図



1. 黒褐色土 10YR4/1 しづか有り 軟性有り ロームブロック多量含む
2. 黑褐色土上 10YR2/1 しづか有り 軟性有り ロームブロック多量に含む
3. 黑褐色土 10YR2/1 しづか有り 軟性有り ロームブロック多量、灰白色粘土を少量含む
4. 黑褐色土 10YR2/1 しづか有り 軟性有り ロームブロック多量、灰白色粘土を少量含む
5. 黑褐色土 10YR2/1 しづか有り 軟性有り ロームブロック多量、灰白色粘土を少量含む
6. 灰白色土上 10YR2/2 しお有り 軟性有り 黑色土と少量含む
7. 灰褐色土 10YR3/2 しづか有り 軟性有り
8. 灰白色粘土上 10YR5/2 しづか有り 軟性有り

Fig.32 SK014 遺構断面図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			長さ	幅	厚さ			
069	埋土一括	石製品	(6.4)	2.8	0.5		2/1 壁裏側斜する。小孔は2箇所確認できる。表面には凹凸がある。	
		石庖丁						

( ) 内の数値は推定の法量、( [ ] ) 内の数値は残存部の法量を表す

Tab13. SK014 出土遺物観察表

## SD015 溝跡

SD016に沿って、南西から北東方向へ延びる溝状の遺構で、北東端と南西端は調査区の外へ延びている。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦で、全面的に八女粘土層に達している。底面には深さ約0.3mの方形の掘り込みが3箇所で検出された。

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器の破片が多数出土している。底部の掘り込みからの出土遺物は少数であるが、須恵器の环身(071)が出土している。

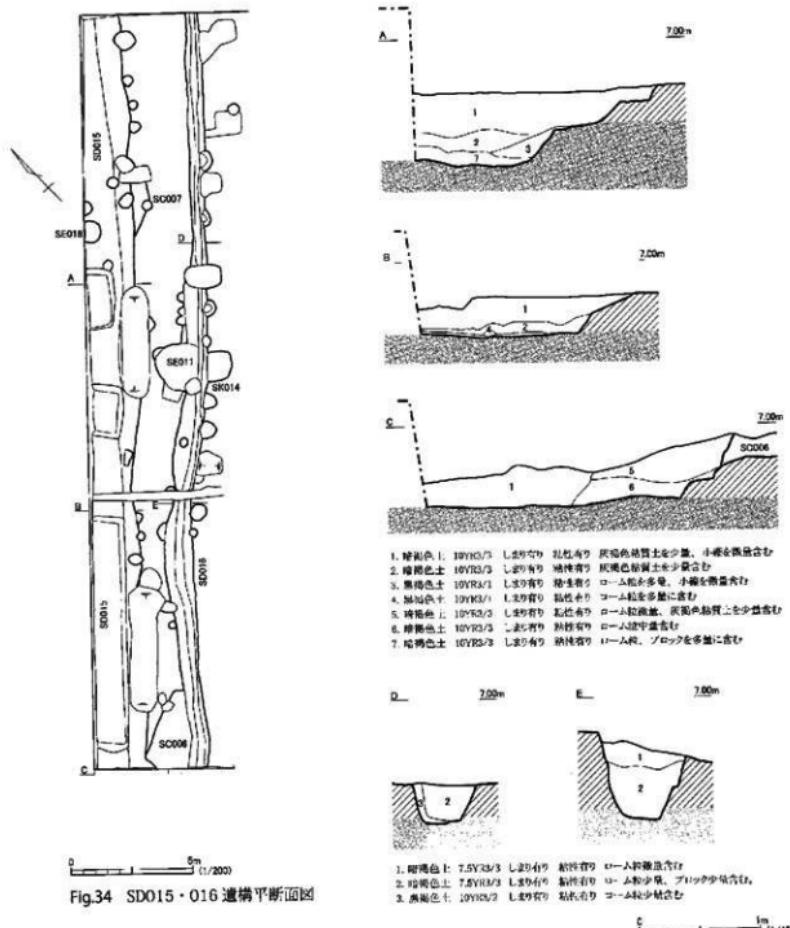


Fig.34 SD015・016 遺構平面図

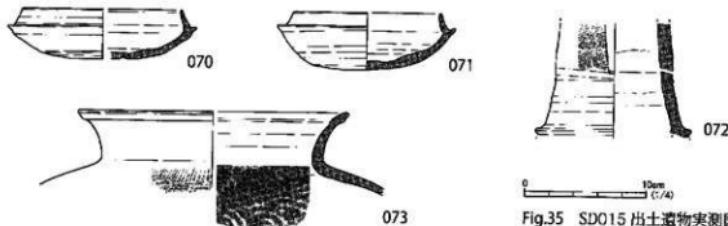


Fig.35 SD015 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特 記	時期
			口径	底径	壁高			
070	埋土 一括	須恵器 环身	(12.9)	(10.4)	(4.1)	灰 N 4/0	面輪へラ削りの环。底部はやや丸みを帯びる。 口縁部はやや内傾し、先端が尖る。底面底部にはナゲの痕がくわく見える。	古墳後期
071	下層 最下層	須恵器 环身	(12.1)	8.7	4.75	灰 10Y5/1	面輪へラ削り。底部はやや丸みを帯びる。口縁部はやや内傾し、先端が尖る。底面底部にはナゲの痕がくわく見える。	古墳後期
072	下層	須恵器 高环	-	-	(9.5)	灰 N 4/0	高环の断面のみ残存。邊し底の一側がが2箇所確認できる。下部は直と横のねじ目と思われる丸みがある。外曲は波状紋が施され、その下部には波模様の模が現る。	古墳後期
073	上層	須恵器 壺	(22.2)	-	(6.2)	灰 10Y5/1	壺部、口縁部のみ残存。肩部は引きが施され、内側のあて具は實函板状である。	古墳後期

( )内の数値は対応の法量、( - )内の数値は残存部の法量を表す

Tab14. SD015 出土遺物観察表

### SD016 溝跡

SD015の南側に沿って検出された溝状の遺構である。SD015と同様に両端は調査区の外へ延びている。幅は最大で約1.2m、確認面からの深さは最深部で約0.8mを測る。壁は急に立ち上がり、底面は八女粘土層に達している。

出土遺物は下層からは少数であるが、上層からは弥生土器、土師器、須恵器の破片が多数出土している。

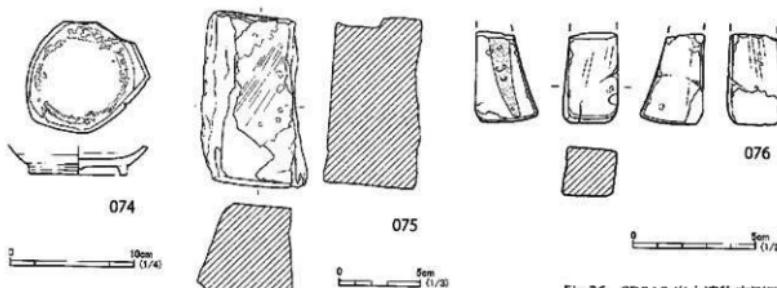


Fig.36 SD016 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	高さ			
074	上層	磁器	—	7.9	(2.4)	オリーブ灰 2.50Y6/1	青釉系の青緑で底の底部のみ残存。内面と高内壁に毫毛模様した痕の跡に残る。	中世
		碗						
075	上層	石製品	長さ	幅	厚さ		先端部を削り出した砥石。使用面は1面のみ確認される。	不明
		砥石	10.9	6.6	5.9			
076	上層	石製品	(3.7)	2.2	2.5		先端は欠損する。使用面は4面と思われる。	不明
		砥石						

( ) 内の数値は複数の法量、( - ) 内の数値は残存部の法量を表す

Tab15. SD016 出土遺物観察表

### SE017 井戸跡

確認面の一部が搅乱に破壊されているが、平面形態は円形を呈し、直径約1.0mを測る。確認面からの深さは約2.4mを測り、八女粘土層には約2.1mの深さで達する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。確認面から約0.6mの辺りで、幅約6cmの小さな段が一周しており、何らかの施設が存在した可能性をうかがわせる。しかし木片や板材等は出土しておらず、また出土遺物も僅少であるため、これ以上は推測し難い。

出土遺物は下層から弥生土器と蝶の破片が僅かに出土しているが、時期は確定し得ない。

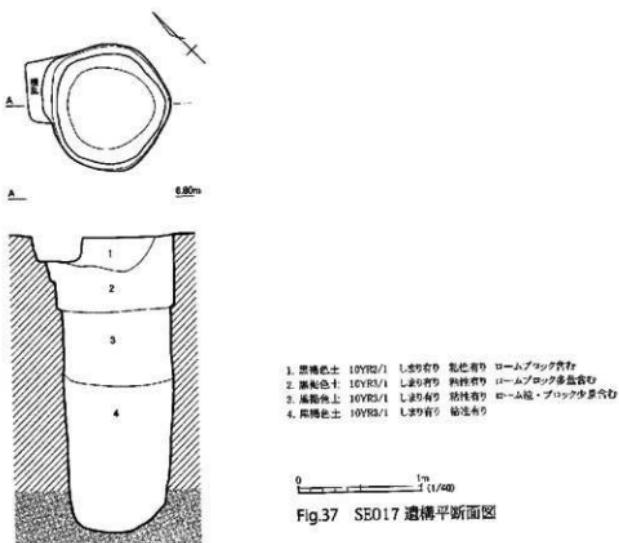
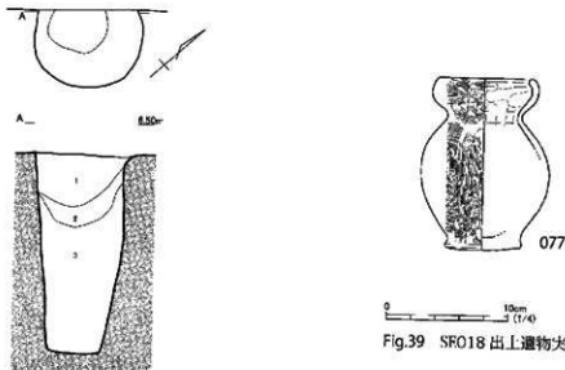


Fig.37 SE017 遺構平面図

## SE018 井戸跡

SD015 の掘削後に検出された。北西側は調査区外にあるが、確認された形状から、直径約 0.9m の円形を呈すると推測される。確認面からの深さは約 1.6m を測り、八女粘土層を掘り込んでいる。壁は底部に向かうに従って先細りとなる。

出土遺物は上層から弥生土器の破片が多数出土しているが、下層からは弥生時代後期に属する完全な形をした袋状口縁壺（077）が 1 点出土している。



- 1. 黒褐色土 10YR5/2 しらべ有り 油性有り ローム少・ブリック少含む 小石無し、炭化物微量含む
- 2. 黄褐色土 10YR3/1 しらべ有り 粘性有り ローム粘土含む
- 3. 黑褐色土 10YR3/2 しらべ有り 粘性有り ローム少含む、粘土ブリック少含む

0 1m (1/40)

Fig.38 SE018 遺構半断面図

Fig.39 SR018 出土遺物袋状口縁壺

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	高さ			
077	下層	弥生土器	7.8	6.1	14.15	灰灰 7.5YR6/2	縁部が一部崩壊するが、ほぼ完形の袋状口縁壺。外壁はハケ剥がれ、六面削痕は少無し。口縁部はツゲ。	弥生後期
		壺						

( ) 内の数字は推定の法量、( ) 内の数値は保存部の法量を表す

Tab16. SE018 出土遺物観察表

## SEO19 井戸跡

西側を擾乱で僅かに破壊されているが、平面形態は直径は約0.8mの円形を呈することは判別できる。確認面からの深さは約2.0mを測り、八女粘土層には達していない。壁はほぼ垂直であるが、中程からは底部に向かうに従って先細りとなる。

出土遺物は上層から弥生土器の破片が多数出土している。下層の遺物は少数であるが、底部付近からは弥生時代後期に属する完全な形をした複合口縁壺（080）が出土している。

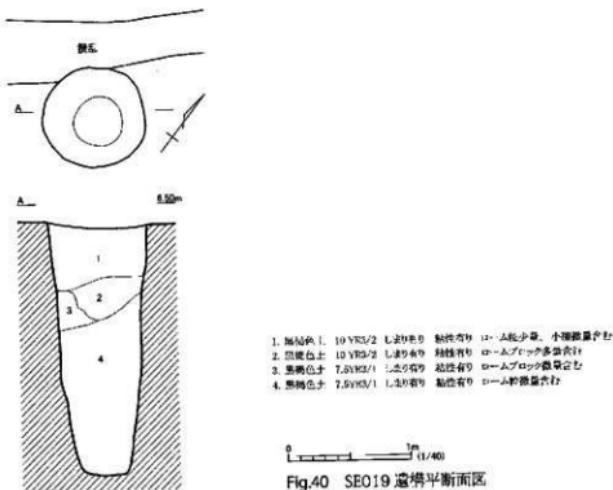


Fig.40 SEO19 還構断面図

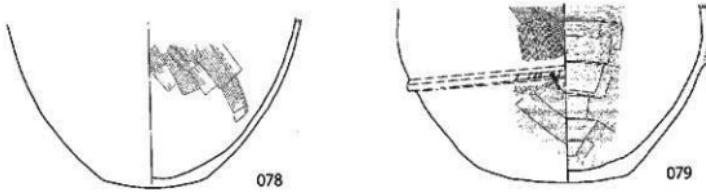


Fig.41 SEO19 出土遺物実測図 -1

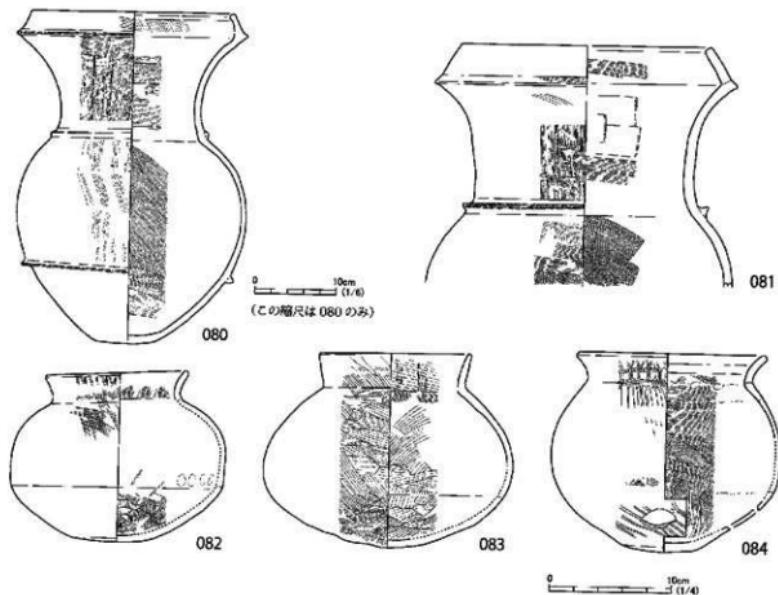


Fig.42 SE019 出土遺物大測図-2

遺物番号	部位	断面	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	高さ			
078	下層	弥生土器 甕	-	8.6 (13.6)	にぶい黄褐色 10YR6/3	側部から底部まで残存。底部は平底だが、丸みを帯びる。外側はナメ、内側はハケ目。底部付近はナダ。	弥生後期	
		弥生土器 甕						
079	中層	弥生土器 甕	-	(9.8) (14.5)	にぶい橙 5YR6/4	底部から底盤まで残存。突起の跡が一つ残り、剥離の異なる突起が部分的に残る。内側表面にはハケ目が施され、内面底盤には指觸痕跡が残る。	弥生後期	
		弥生土器 甕						
080	中層 下層	弥生土器 甕	24.8	7.5	41.0	灰黄褐色 10YR6/2	ほぼ完全な複合口縁甕。底盤は丸みを帯びる。底部に切妻突起、瓶部の付け根は三尖向舟形が残る。(1)瓶部の腹には刻印が施される。内面ともにハケ目。	弥生後期
		弥生土器 甕						
081	上層	弥生土器 甕	20.4	-	(19.7)	にぶい橙 7.5YR6/4	複合口縁甕の口縁部から脚の上部まで残存。瓶部の付け根に削り突起が残る。内外面底部はハケ目。内面開口部はへり削り。	弥生後期
		弥生土器 甕						
082	下層	弥生土器 甕	11.6	6.5	14.2	にぶい黄褐色 10YR7/2	口縁部は僅かに欠損する。外表面はハケ目。口縁部はハケ目後、盛ナダであるが、僅かに直線的の磨きが見られる。内面は底盤がハケ目、瓶部にはヘラの痕が残る。軽井は僅かに金糞母を含む。	弥生後期
		弥生土器 甕						
083	下層	弥生土器 甕	12.4	-	16.0	灰白 5YR7/1	(1) 瓶部は僅かに欠損する。内外面ともハケ目。(2) 瓶部はハケ目後、盛ナダ。脚上は僅かに金糞母を含む。	弥生後期
		弥生土器 甕						
084	下層	弥生土器 甕	15.6	6.1	16.4	にぶい橙 7.5YR6/4	丸形容。底部は丸みを帯びており、底部下に治成後の穿孔がある。外側断面はハケ目後、磨きが施されるが、中央部は押出し感度が強い。(1)瓶部はハケ目後底盤に磨きが施され、口縁部と付け根に点状の工具痕が残る。内面はハケ目。軽井は全量母を作成。	弥生後期
		弥生土器 甕						

Tab17. SE019 出土遺物観察表

## SE020 井戸跡

平面形態は梢円形を呈し、長径約1.1m、短径約1.0mを測る。確認面からの深さは約1.4mを測り、八女粘土層には達していない。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。周囲の井戸と比較すると浅い部類に属する。

出土遺物は上層から弥生土器の破片が多数出土している。下層の遺物は少數であるが、弥生時代後期に属する完全な形をした小型壺が(085)出土している。

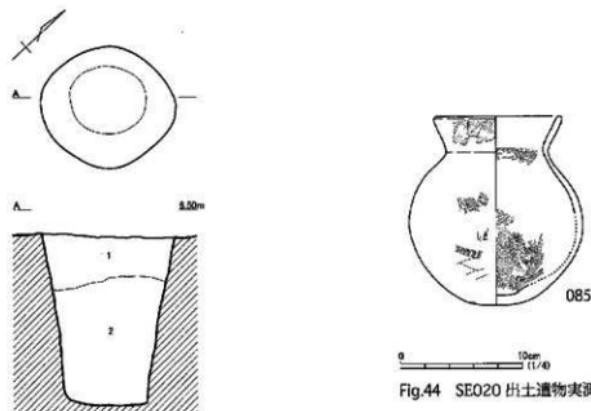


Fig.44 SE020 出土遺物実測図

1. 黒褐色土 7.5YKG/2 しまり有り 線性49 ローム粘土質、灰化物微量含む  
2. 黑褐色土 7.5YR3/2 しまり有り 線性49 ローム粘土質、小量灰分含む

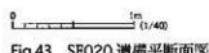


Fig.43 SE020 遺構断面図

遺物番号	層位	層種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			1口径	底径	高さ			
085	下層	弥生土器	10.4	4.8	15.55	灰黄 2.5Y7/2	口縁部を僅かに丸削する。底部は丸みを帯びる。外周辺1箇所、側 部がハケ目、底部は楕円形。内面は側部がハケ目、口縁部、底部4 箇所ナメ。	弥生後期
		壺						

( )内の数値は推定の法量、( )内の数値は探査部の法量を表す

Tab18. SE020 出土遺物観察表

## SE021 井戸跡

確認面は擾乱で破壊されているが、平面形態は橢円形を呈することは判別できる。長径約0.7m、短径約0.6mを測る。確認面からの深さは約1.3mを測り、八女粘土層には達していない。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。周囲の井戸と比較すると小さく、浅い部類に属する。

出土遺物の点数は少なく、上層からの遺物が多勢を占める。底部付近からは弥生時代後期に属する完全な形をした壺が2点出土している。そのうちの長頸壺には(086)、2つの意匠製のある線刻が、張り出した胴部をめぐるように描かれている。

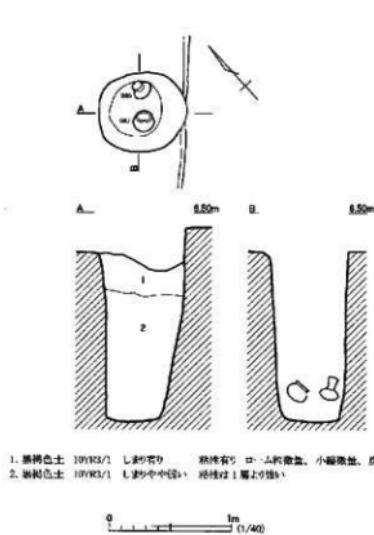


Fig.45 SE021 遺構断面図

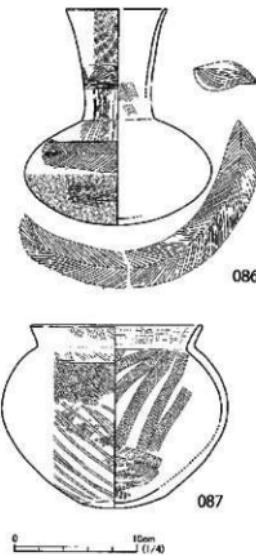


Fig.46 SE021 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	高さ			
086	下層	弥生土器	8.3	—	17.85	灰白 5Y8/1	I 頸部を欠くがほぼ完全の長颈壺。底部は丸底。口縁部から胴上部までは腹内側の窓き、B部以下部は黑色消褪が進される。内面底部の下部はハケ目、C部は唐ナゲ。腹部は輪廻状が施され、腹部にも意匠性ある線刻が倒産り2/3に施される。底土は砂中に全實得を含む。	弥生後期
		壺						
087	下層	弥生土器	141.0	7.0	15.1	淡黄褐 7.5YR8/4	完形の壺。底部は丸みを帯びる。外腹側上部はハケ目、下部はハケ目後ナゲ、さらに窓きが施される。内底はハケ目。I(腰部)以上部は窓ハケ、下部は唐ナゲ。付け根にはハケの窓が点状で残り、内底は窓ハケ。赤色部分が焼けされていたと思われるが、所減が甚しいため、口縁部、側面的一部分しか確認できない。底土は砂中に全實得を含む。	弥生後期
		壺						

( )内の数値は推定の法量。( )内の数値は残存部の法量を表す

Tab19. SE021 出土遺物観察表

## SE022 井戸跡

平面形態は橢円形を呈し、長径約1.0m、短径約0.8mを測る。確認面からの深さは約2.0mを測り、底部付近で八女粘土層に達している。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁は確認面付近が少し奥に広がる。

埋上にはしまりがなく、ブロック状のローム上を土体としており、下層からは現代のごみが混入していた。しかし周囲の井戸跡と比較しても、規模や形体が類似することから、以前に発掘された遺構と判断した。

遺物はこうした擾乱層から陶磁器と弥生土器片が2点出土しているだけである。

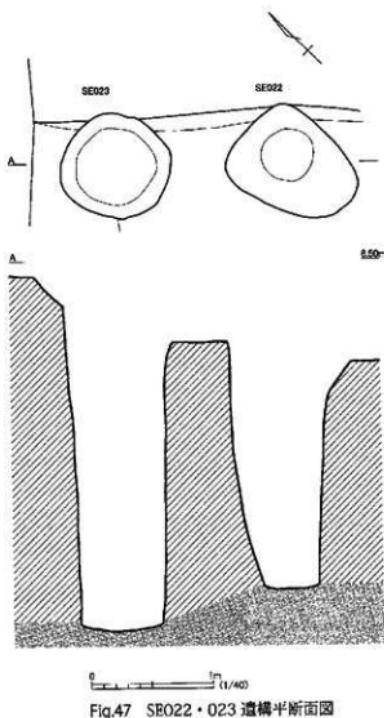


Fig.47 SE022・023 遺構半断面図

## SE023 井戸跡

確認面は擾乱されているが、平面形態は円形を呈することは判別できる。直径は約0.9m、確認面からの深さは約2.7mを測り、底部付近で八女粘土層に達している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。SE022と同様、規模や形体が周囲の井戸跡と類似することから、以前に何らかの理由で発掘された井戸と考えた。出土遺物はなく、時代は判然としない。

## SE024 井戸跡

確認面は攪乱されているが、平面形態は橢円形を呈することは判別できる。長径約1.1m、短径約0.8m、確認面からの深さは約2.2mを測り、八女粘土層には達していない。木造構も先の2つの遺構と同様に、以前に発掘された井戸と考えられる。

出土遺物はなく、時代は判然としない。

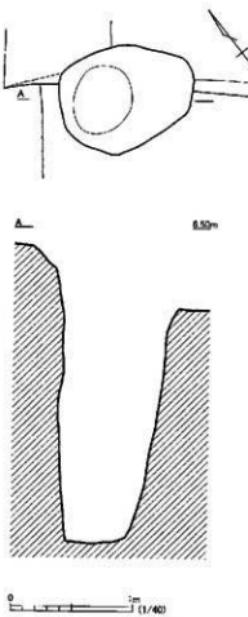
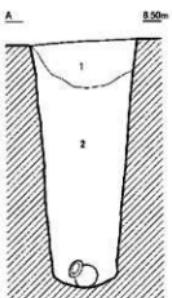
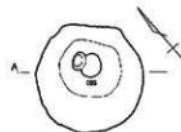


Fig.48 SE024 遺構断面図

## SE025 井戸跡

平面形態は円形を呈し、直径約0.9mを測る。確認面からの深さは約2.0mを測り、壁は底部に向かうに従って先細りとなる。八女粘土層には達していない。

出土遺物の点数は少なく、底部付近からは弥生時代後期に属する完形の袋状口縁壺（088）と石庵丁（089）が出土している。



1. 黒褐色土 7.5YR2/3 1.さり有り 粘性有り ロームブロック多生、小礫少量。  
炭化物を微量含む  
2. 黑褐色土 7.5YR2/3 1.さり有り 粘性有り ロームブロック少量、小礫少含む

0 1m (1/40)

Fig.49 SE025 遺構平面断面図

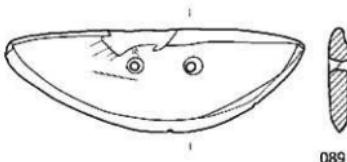
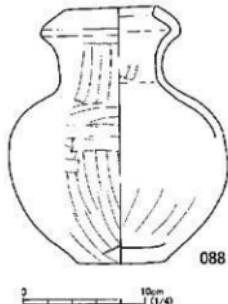


Fig.50 SE025 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法寸 (cm)			台詞	特徵	時期
			口径	底径	深さ			
088	下層	甕生土器	7.3	7.4	21.2	にぶい粒 7.5YR6/4	丸形容の口沿と輪郭。外縁は側部は緩いヘラ削り、円弧は縁のヘラ削り。口縁部は横ナギ。内縁は横削がヘラ削り、底部から側部はナギ。軸には縦長い凹部を含む。	弥生後期
		壺						
089	下層	石製品	長さ	幅	厚さ		半片形の刀身で、穿孔は2箇所。表面は削磨があり、刃は僅かに欠損する。	
		石旗竿	13.3	4.3	0.8			

( ) 内の数字は指定の位置。〔 〕内の数値は現存部の結果を表す

Tab20. SE025 出土遺物観察表

## SD026 溝跡

南東方向から北西方向へ延びる溝である。両端とも擾乱により破壊されている。最大幅約0.8m、確認面からの深さは最大約0.2mを測る。東側は段があり、緩やかに立ち上がる。

出土遺物はなく、時代は判然としない。

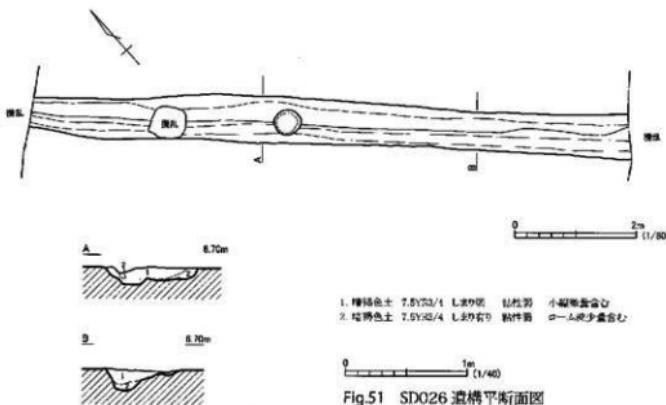


Fig.51 SD026 遺構平断面図

### SE027 井戸跡

平面形体は円形を呈し、直径約0.8mを測る。確認面からの深さは約2.1mを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から約1.6mの深さで八女粘土層に達している。

出土遺物は中層から下層にかけて、弥生時代中期から後期に属する上器が多数出土している。中層からは完形の器台や底部を欠いた大型の甕(094)が出土している。この甕は腹部から下半分が欠損しており、井戸に付設した機能が考えられる。下層からは木片や弥生時代中期から後期に属する完全な形をした甕(097・101・102)等が出土している。

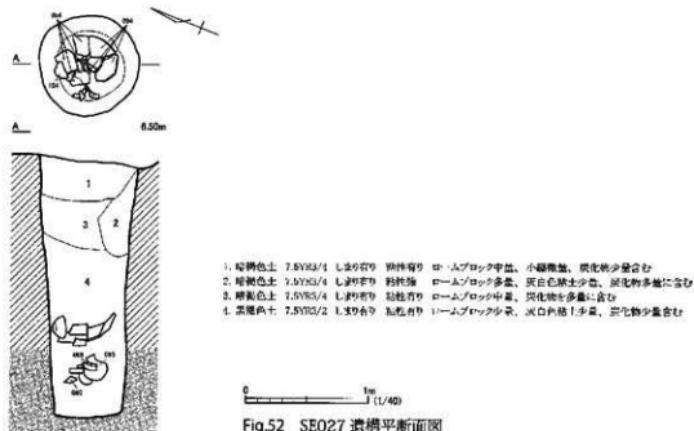
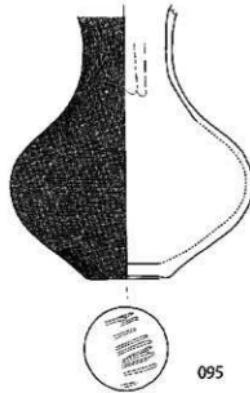
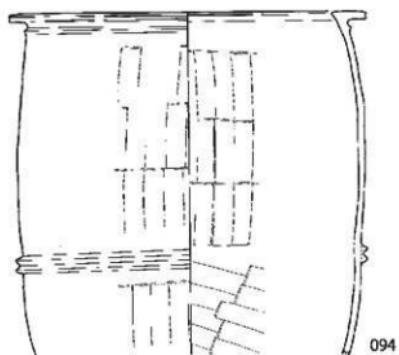
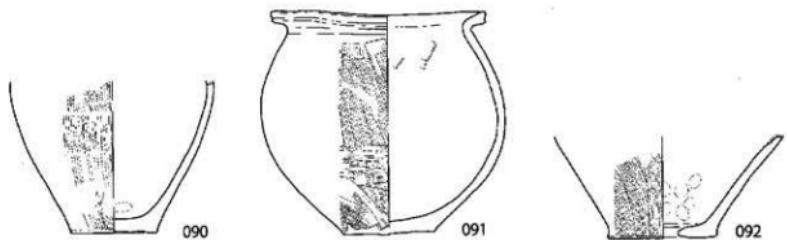


Fig.52 SE027 遺構平断面図



0  
25cm  
(1/10)

(この縮尺は 094のみ)

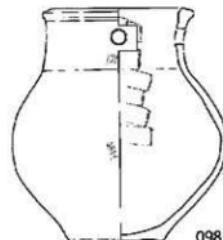
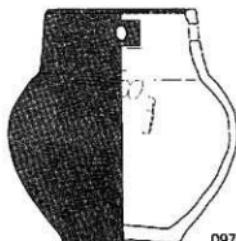


Fig.53 SF027 出土遺物実測図 -1

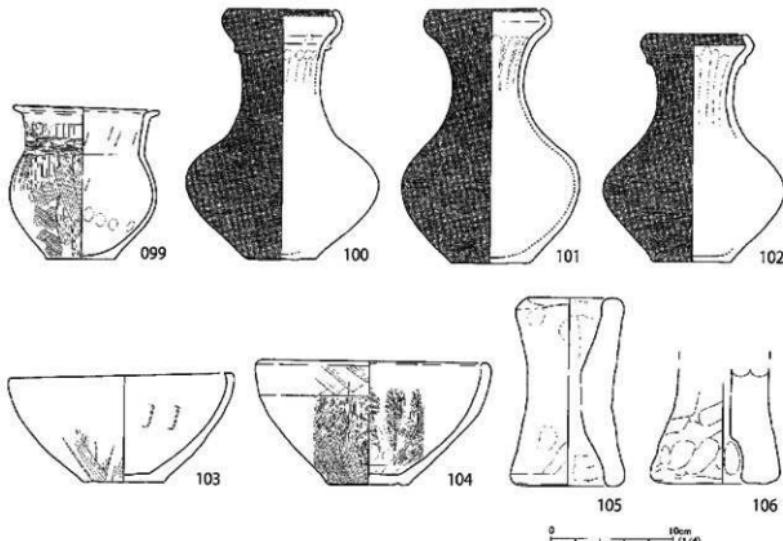


Fig.54 SE027 出土遺物実測図 -2

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特 質	時期
			上径	底 径	器 高			
090	下層	弥生土器 甕		(7.1)	12.5	にぶい橙 7.5YR6/4	底部付近のみ残存。外壁はハケ目、内面はナデ、底部に撲突痕が残る。底土は砂粒が挟まる。	弥生後期
		甕	17.3	7.5	18.4	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部を少し欠損する。外壁はハケ目、口縁部は模ナデ。内面は底部に僅かにヘラ削りが見られ、底部から底部はナデ。	弥生後期
092	下層	弥生土器 甕	—	8.9	(8.4)	橙 5YR6/6	底の底部。底は平底で、霧孔がある。外壁は複数方向のハケ目、内面はナデが施され、底部付近に撲突痕が残る。	弥生後期
		甕	48.7	—	(11.3)	橙 5YR7/6	大型甕の口縁部付近のみ残存。口縁部の下に支壺が1箇所ある。内側ともナデ。底土は織かい砂粒を含む。	弥生中期
094	中層 下層	弥生土器 甕	73.0	—	(71.0)	にぶい橙 7.5YR7/4	底の口縁部から底部まで残存。底孔から底部下部が全くなく、井戸型としての利用が付与される。口縁部下に「角突痕」があり、側面に2箇所ある。内外面ともヘラ削りで、口縁部は模ナデ。	弥生中期
		甕	—	6.8	(21.7)	橙 2.5YR6/8	赤色顔料を散布した甕。口縁部を欠損する。更に底部は強く外側と、内面は底部まで付着している。外壁は全面的にヘラ削りで、底部も焼きが施される。内面はナデ。底土は粘土。	弥生中期
096	下層	弥生土器 甕	—	8.9	(8.5)	橙 7.5YR6/6	底の底部。底は平底で、僅かに上付底になっている。外壁はハケ目、内面はナデ。	不明
		甕	—	—	—	—	—	—

( )内の値は推定の法量、〔 〕内の値は實寸部の法量を表す

Tab21. SE027 出土遺物観察表-1

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	器高			
097	下層	弥生土器 壺	12.0	9.6	19.3	赤褐色 5YR4/8	赤色顔料を施した壺口部。側部を少し欠損する。口縁部に1列の透か穴がある。外側は摩耗が激しいが、横方向のヘラ剥きが確認できる。口縁部は擦ナメ、内面はヘラ削り。	弥生中期
		漆	12.4	7.4	19.2	7.5YR6/4	口縁部、底部を少し欠損する壺口部。口縁部に1列の透か穴がある。外側剥離部はハケ目。口縁部は擦ナメ、内面はヘラ削り。底土は漆跡を含む。	弥生中期
098	下層	弥生土器 壺	11.9	5.5	12.6	にぶい橙 5YR6/4	口縁部、側部を少し欠損する壺口部。口縁部に1列の透か穴がある。外側剥離部はハケ目。口縁部は擦ナメ、内面はヘラ削り。底土は漆跡を含む。	弥生中期
		壺	8.3	5.8	20.6	明赤褐色 2.5YR5/8	赤色顔料を施した壺口部(破損)。口縁部下には突起が1ヶ所ある。削れは口部にも側面に付着する。外側剥離部は横方向のヘラ剥き。底部は横方向のヘラ削り。口縁部は擦ナメ。内面は擦ナメナメで、剥離底部が残る。底土は粘土。	弥生中期
101	下層	弥生土器 壺	9.2	6.4	20.9	赤褐色 5YR4/8	赤色顔料を施した壺口部(破損)。削れを側面に欠損する。外側は底部下半部は横方向のヘラ削り。削れ部から底部は横方向のヘラ削き。口縁部は擦ナメ。内面剥離部はナメ。底土は粘土。	弥生中期
		壺	7.8	6.4	18.7	赤褐色 5YR4/8	ほぼ完形の錐状口錐部。口縁部下に突起が1ヶ所ある。底部下部は横方向の削り。底部から底部上部は横方向の削りが施される。底部内面は擦ナメ。内面剥離部はナメで、剥離底部が残る。	弥生中期
102	下層	弥生土器 壺	18.5	6.6	9.0	褐色 5YR6/6	外側はハケ目、内面はヘラ削りが施される。内面の口縁部付近。底土は粘土を多様に含む。	弥生中期
		鉢	19.2	6.6	10.3	褐色 5YR6/6	口縁部を少し欠損する。内外ともハケ目。口縁部はハケ目後擦ナメ。内面にはハケ目上の内面剥離部が残る。	弥生中期
105	中層	弥生土器 器台	6.7	7.1	15.5	にぶい黄褐色 10YR7/3	1.5cmの高さの、内面と底もナメが、内面の一帯にヘラのような丁目にによるナメの痕が残られる。外側の一部には赤色顔料の付着が見られるが、全周部では確認できない。底土は粘土を含む。	弥生中期
		器台	...	10.4	(9.5)	にぶい黄褐色 10YR7/3	器台を支継ぐ。外側はハケ目が施されたと思われるが、摩耗のため不鮮明。内面はナメ。	弥生中期
106	下層	弥生土器 器台	...	10.4	(9.5)	にぶい黄褐色 10YR7/3	器台を支継ぐ。外側はハケ目が施されたと思われるが、摩耗のため不鮮明。内面はナメ。	弥生中期

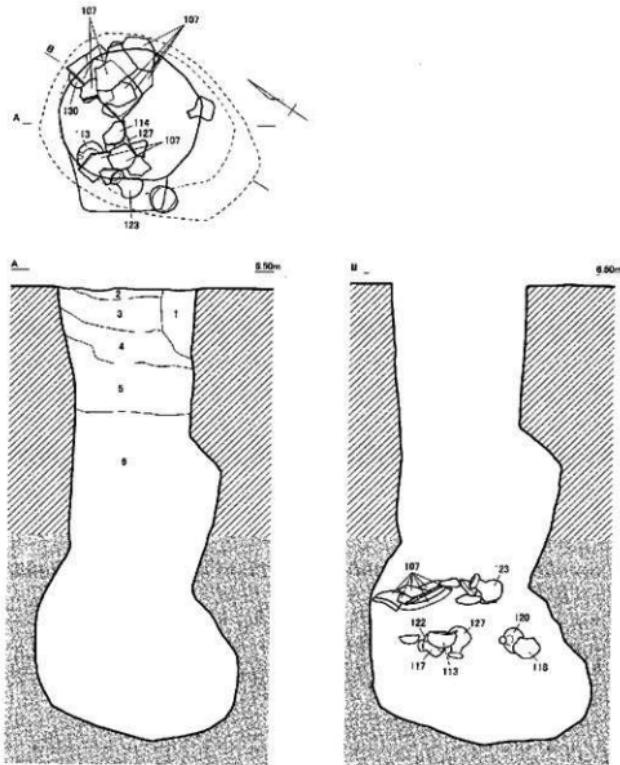
( ) 内の数値は推定の数値、( ) 内の数値は残存部の状態を表す

Tab22. SEO27 出土遺物觀察表-2

## SE028 井戸跡

確認面は攪乱を受けているが、平面形態はほぼ円形を呈することは判別できる。直径は約1.1m、確認面からの深さは約3.8mを測り、八女粘土層には約2.1mの深さで達している。壁はほぼ垂直に立ち上るが、下部が袋状に大きく膨らむ。

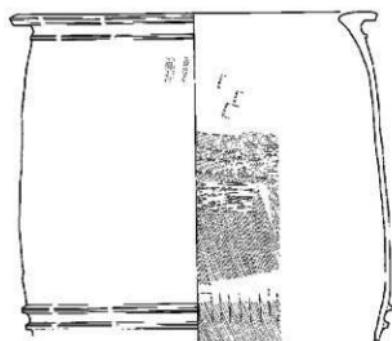
他の井戸と比較して出土遺物の点数が多い方と言える。上層では布留系の壺(112)をはじめ外來系と考えられる土器器片が認められる。中層から下層にかけては弥生時代中期から後期に属する完形の壺、甕等が集中して出土している。また、木製品(134～138)や板材、堅果類の種子も数個ほど出土している。大型の甕(107)の破片は、復元したところ胴部中央付近から下を欠損しており、SEO27 出土の甕と同様に、井戸に付設した機能が考えられる。また、下層から出土する完全な形をした甕は、赤色顔料を施したもの(119～121・123・127)が多く認められた。



1. 粘土質土 10YR2/3 じょうゆり 粘性有り  
 2. 黒褐色土 10YR3/2 しまりくろ 色性有り  
 3. 黑褐色土 10YR3/2 しまりくろ 色性有り  
 4. 黑褐色土 10YR3/2 じあくゆり 粘性有り  
 5. 黑褐色土 10YR3/2 じあくゆり 粘性有り  
 6. 黑褐色土 10YR3/2 じあくゆり 粘性有り
- ロームブロック少、粘土ブロック少量含む  
 ロームブロック多量に含む  
 ロームブロック微量、炭化物を微量含む  
 ロームブロック少量に含む  
 灰白色粘土を少量含む

(0/40)

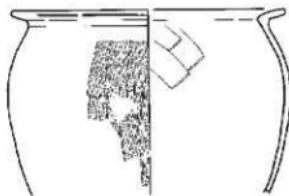
Fig.55 SF028 造構平衡面図



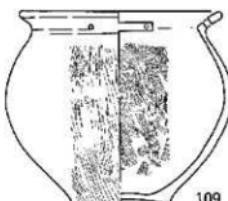
107

25cm  
(1/10)

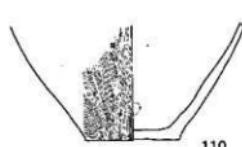
(この縮尺は 107 のみ)



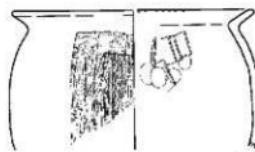
108



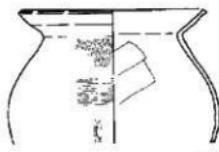
109



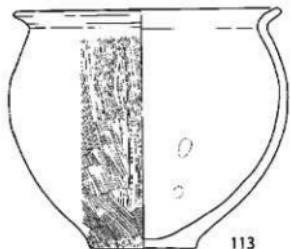
110



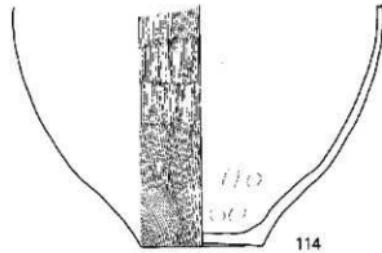
111



112



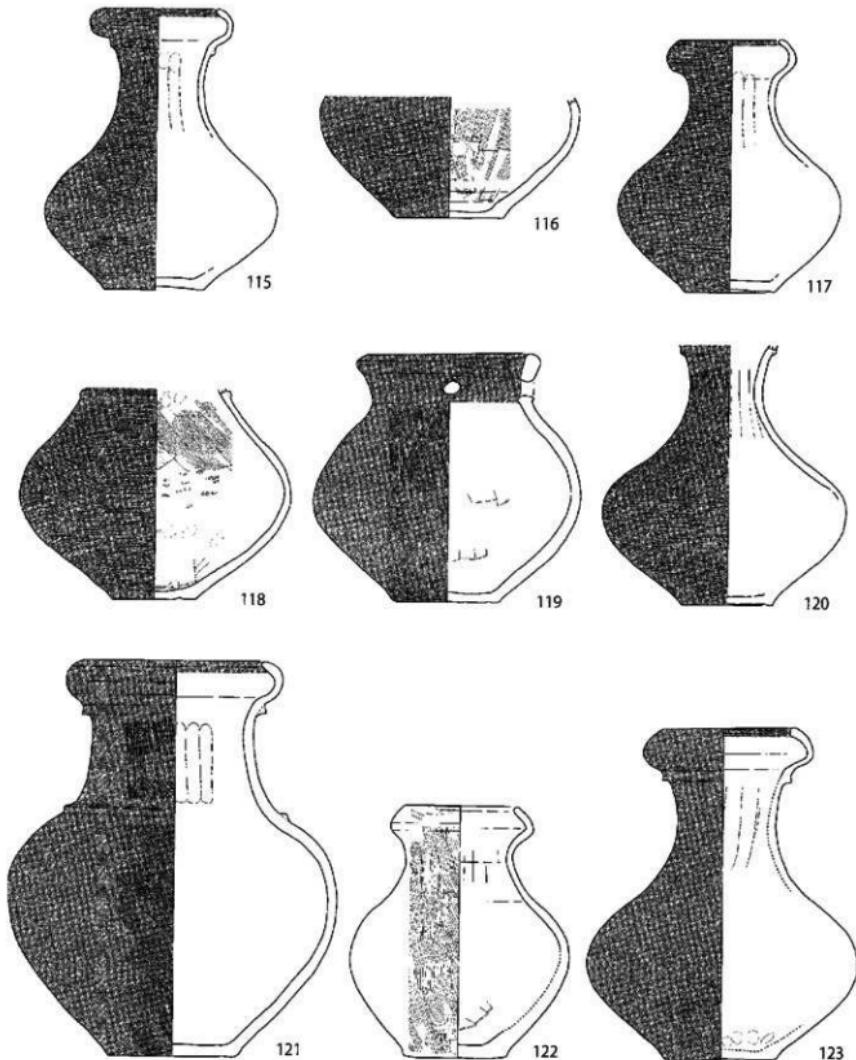
113



114

0 10cm  
(1/4)

Fig.56 SE028 出土遺物実測図 -1



0 10cm  
(1/4)

Fig.57 SRE028 山土遺物実測図 -2

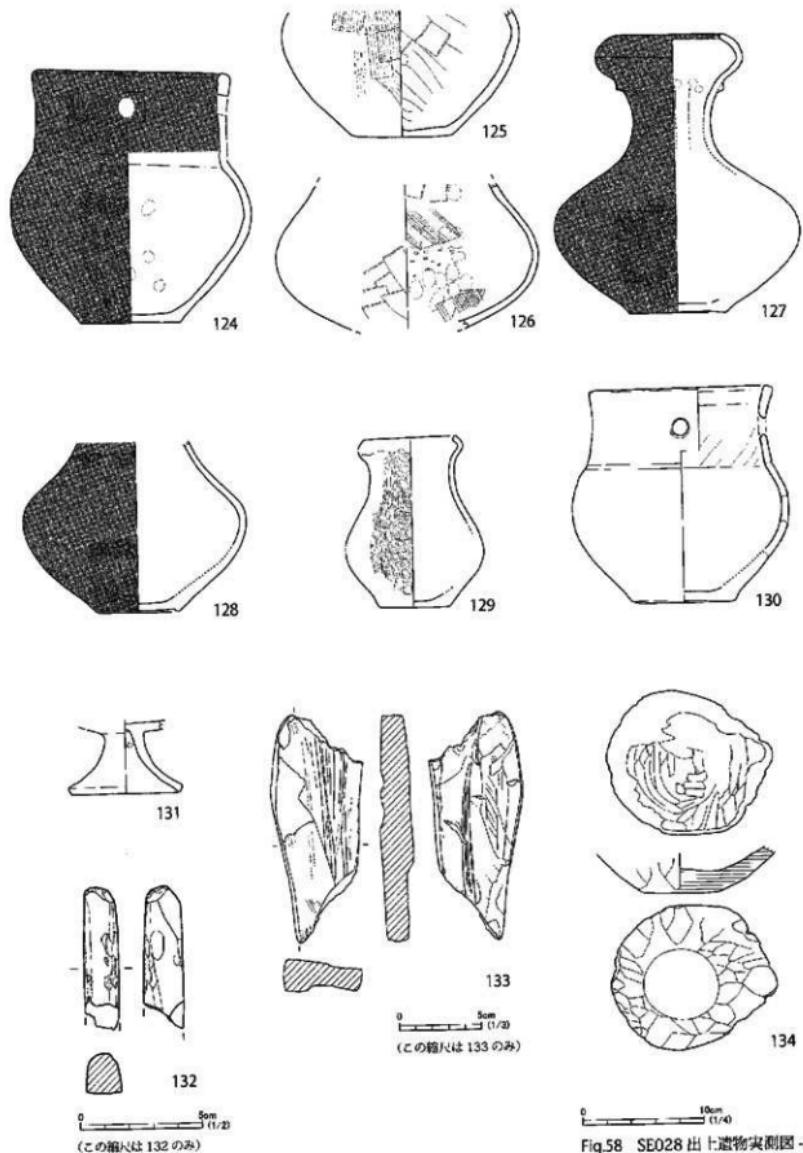


Fig.58 SE028 出土遺物実測図 -3

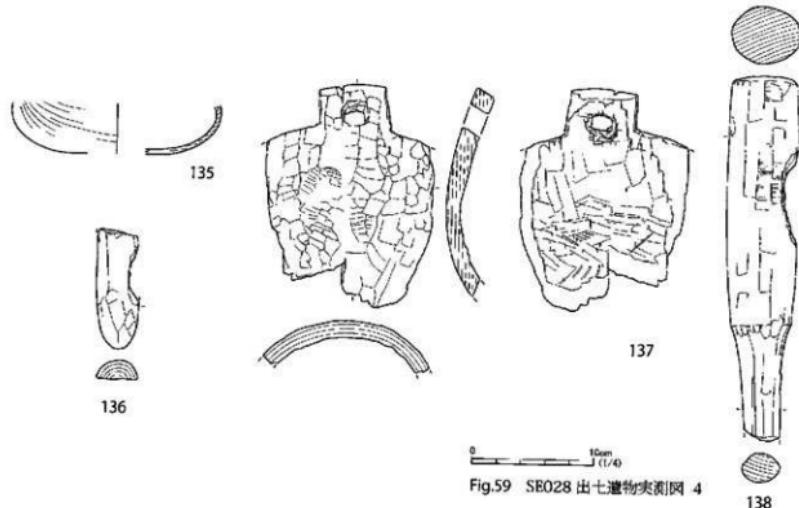


Fig.59 SE028 出土遺物実測図 4

138

遺物番号	肩位	器種	法量(cm)			色調	特 質	時期
			上径	底径	高さ			
107	中層 下層	弥生土器 甕	75.0	—	[68.0] 7.5YR7/4	底の口縁部から底部まで灰白。底部から腹部下半がぐるぐる、円錐の形でして剥離が考えられる。外表面は押滅しているが、ハケ口が残され。内面はヘラ削り、とハケ口が施される。口縁部は横ナギ。口縁部以下に内腹が1次通り、瓶部は2次通り。	灰白	弥生中期
108	中層 下層	弥生土器 甕	(22.5)	—	[15.2] 10YR7/3	底部は残存せず、口縁部も一部のみ残存する。口縁部は折返し、ぐずりに近い。外表面はハケ貝、口縁部内面はハケ後ナギ(穂部は横ナギ)。内面はヘラ削り、剥離部はナギ。	灰白	弥生後期
109	中層 下層	弥生土器 甕	16.2	8.3	15.9 10YR6/2	底部は平底で、僅かに「47度」になっている。外表面ともハケ口で、口縁部は横ナギ。内面は横ナギ。口縁部が火焔しているが、2割1辺の穿孔があつたと推測される。	灰黄褐	弥生後期
110	中層 下層	弥生土器 甕	—	7.8	9.4 10YR6/3	底の底部のみ残存。外壁は竪方向のハケ口、内面はナギが施され。瓶頭部が僅かに残る。	灰白	弥生後期
111	中層	弥生土器 甕	(19.6)	—	(11.4) 2.5Y7/3	外壁はハケ口。内面はヘラ削りが施され、竪方向の内腹が残る。口縁部は横ナギが施され、先端付近に剥離が施される。	浅黄 2.5Y7/3	弥生後期
112	上層 中層 下層	占式土器 甕	(15.4)	—	11.0 2.5Y7/2	布留系の表皮。外壁はハケ口、内面はヘラ削り、口縁部は横ナギが施されている。土壁は作糸を多量に含む。	灰黃 2.5Y7/2	弥生後期
113	下層	弥生土器 甕	22.4	8.8	19.8 7.5YR8/3	底部は平底。口縁部はぐく字に折れ、外弧する。外壁はハケ口が施され。内面は火焔削離部はナギだが、口はヘラ削り継ぎ、ナギ。口縫部は外共に横ナギ。	灰白	弥生後期
114	中層	弥生土器 甕	—	10.0	[19.8] 5YR6/6	底の底部から瓶部のみ残存。底部は平底。外壁はハケ口。内面は瓶部付近に剥離平面が残る。土壁は作糸を多量に含む。	橙 5YR6/6	弥生中期

（）内の数値は指定の法量、〔〕内の数値は保存時の法量を表す

Tab23. SE028 出土遺物測定表 -1

遺物番号	層位	器種	法規(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底深	高さ			
115	中層 下層	弥生土器 壺	(9.1)	8.2	23.1	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下に突起が1本ある。外側はヘラ型きが施される。口縁部内面はナダ、底面はナダで仕上げている。	赤褐色 SYR4/8	弥生中期
		壺						
116	中層	弥生土器 壺		9.0	[19.5]	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下に突起が1本ある。外側は横方向のヘラ型きが施される。底面付近は板ナダで、底面下部が残る。底付近が金属性で仕切られる。	赤褐色 SYR5/4	弥生中期
		壺						
117	下層	弥生土器 壺	-	9.3	[15.6]	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが施され、内面はナダで、底面下部が斜めに残る。	赤褐色 2.5YR5/8	弥生中期
		壺						
118	下層	弥生土器 壺	-	6.7	[17.4]	外側はヘラ型きの赤褐色を帯びた壺。内面は底面付近はヘラ型きが施される。底面と口縁部内面はナダで、底面下部は板ナダで仕切られる。底付近が金属性で仕切られる。	赤褐色 2.5YR6/8	弥生中期
		壺						
119	下層	弥生土器 壺	13.2	8.8	20.5	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。外側は横方向のハケ付。底面は板ナダで、内面はナダ。底付近は横方向のヘラ型き。内面側面はヘラ削り。底付近には机引跡が残る。	赤褐色 5YR4/6	弥生中期
		壺						
120	下層	弥生土器 壺	-	7.4	[21.4]	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。内面は底面下部は板ナダで、底面下部は板ナダで仕切られる。	赤褐色 2.5YR5/8	弥生中期
		壺						
121	中層	弥生土器 壺	14.8	10.3	32.5	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。内面はナダで、底付近は板ナダで仕切られる。底付近には机引跡が残る。	赤褐色 10YR6/3	弥生中期
		壺						
122	5層	弥生土器 壺	9.2	8.4	20.8	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。内面はナダで、底付近は板ナダで仕切られる。	赤褐色 10YR6/3	弥生中期
		壺						
123	中層	弥生土器 壺	10.6	9.0	27.3	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。内面はナダで、底付近は板ナダで仕切られる。	赤褐色 5YR6/8	弥生中期
		壺						
124	中層 下層	弥生土器 壺	14.9	8.3	20.9	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。内面はナダで、底付近は板ナダで仕切られる。	赤褐色 2.5YR5/8	弥生中期
		壺						
125	中層	弥生土器 壺	-	8.2	[10.4]	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。内面はナダで、底付近は板ナダで仕切られる。	赤褐色 2.5YR6/2	弥生中期
		壺						
126	中層	弥生土器 壺	-		(11.8)	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。内面はナダで、底付近は板ナダで仕切られる。	赤褐色 10YR5/3	弥生中期
		壺						
127	下層	弥生土器 壺	8.5	7.9	22.9	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。内面はナダで、底付近は板ナダで仕切られる。	赤褐色 7.5YR6/4	弥生中期
		壺						
128	下層	弥生土器 壺	-	6.8	[14.0]	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。内面はナダで、底付近は板ナダで仕切られる。	赤褐色 2.5YR5/6	弥生中期
		壺						
129	下層	弥生土器 壺	7.4	5.7	14.1	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。内面はナダで、底付近は板ナダで仕切られる。	赤褐色 7.5YR7/3	弥生中期
		壺						
130	下層	弥生土器 壺	15.0	8.5	17.8	赤褐色を帯びた袋状の腹部。口縁部下から底面まで、外側は横方向のヘラ型きが1対ある。内面はナダで、底付近は板ナダで仕切られる。	赤褐色 10YR7/2	弥生中期
		壺						

( ) 内の数値は推定の法則、( ) 内の数値は椎右衛門の法則を表す

Tab24. SE028 出土遺物觀察表-2

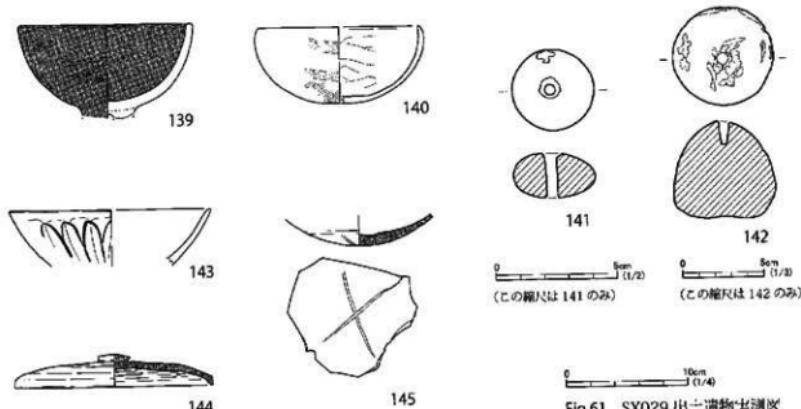
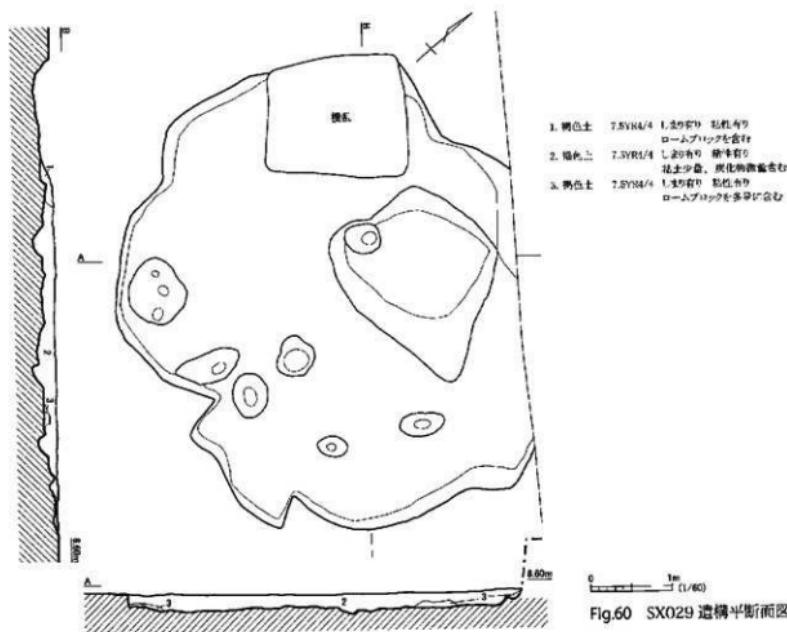
遺物番号	層位	器種	法寸(cm)			色調	特徴	時代
			口径	底径	高さ			
131	中層	弥生土器 高杯	—	8.8	(6.1)	灰白 5YR7/1	高厚の鋸部のみ残存。外径は壁厚が薄いため、底盤部に不規則な凹凸に伴う内面にサギ上げの痕が残る。	弥生時代
		石製品 板状片刃石器	長さ (5.8)	幅 1.4	厚さ 1.65		刃脚部を欠損しているが小形方角状片刃石斧である。表面に細かな削痕が残る。	
132	中層	石製品 砾石	長さ (14.1)	幅 5.7	高さ 2.1		青褐色部は欠損する。使用歴にはノミ痕、細かい削痕と肩状の使用痕が残る。	弥生時代
		木製品 杯	口径 —	底径 6.2	高さ (3.7)		底部のみ残存し、平底。内外面とも削り面が残る。	
135	下層	木製品 容器	長さ —	径 —	—		削り抜きの碗。大部分が欠損している。残存部は5mm程度で薄く、複数の内面に伴う赤色顔料の付着が確認される。	弥生時代
		木製品 不明	長さ (9.9)	径 3.5	—		棒状の大腹盆の外端部のみ残存。断面は半円形を呈す。先端は丸みを帯びて尖る。	
137	下層	木製品 容器	長さ —	径 —	1.7		削り抜きの把手付きの容器で、底部、洞部は欠損する。把手には方形の孔を穿つ。内外面に細かい削り跡が残る。	弥生時代
		木製品 杵	長さ (30.0)	最大径 5.7	—		端部はやや丸みを帯びる。断面はやや扁平を呈する。握り部分は軽く切り出している。	

( ) 内の数値は推定の表示、( - ) 内の数値は残存部の状態を表す

Tab25. SE028 出土遺物観察表-3

### SX029 不明遺構

平面形態は不整形で、最も幅のある箇所で約 6.0m を測る。底面は凹凸が著しく、確認面からの深さは 0.1 m 前後を測る。埠上には炭化物や粘土等を僅かに含み、底面には被熱作用を受けた箇所が認められる。遺物は全く出土せず、遺構の性格や時代とも不明である。



遺物番号	層位	器種	法 尺 (cm)			色調	特 徴	時 期
			口 径	底 径	高 度			
139	下層	浮生土器	14.2	—	(7.7)	赤褐色 2.5YR 4/6	赤褐色の外側のみ残存。全周に赤褐色が施される。外側は摩滅しているが、せかに焼きが強度である。胎土は砂粒を含む。	弥生中期
		高環						
140	下層	上鉢器	13.0	—	(6.0)	橙 7.5YR 6/6	鉢形の外側のみ残存。外側は丸底で、内面には縫があり、平底となる。口部は比較的よくやや凹凸している。外側はハケ目、外側はヘラ削りが施されている。胎土は焼かに砂粒を含む。	古墳時代
		鉢						
141	表土	上製品	單	横	厚さ	褐灰 5YR 6/1	やや扁平を呈す。径 5mm 程度の孔がある。胎土には砂粒を多量含む。	弥生時代 ～ 古墳時代
		土鉢		3.3	3.4			
142	表土	石調品	縱 6.0	横	6.0		先端は部分的に欠損している。底部はほぼ平坦。表面は滑らかである。表面の孔は 1mm 程度の大きさで、貫通はしていない。	弥生時代
		石鏡		6.25				
143	上層	青磁	(16.4)	—	(4.6)		電気炉窯の青磁。口縁から全体にかけての一層が焼付。外側は薄手な。SD015 調査の「裏面」であったが、調査終了時のため、裏面（表土）から盗入した可能性がある。	中世
		碗						
144	埴	須恵器	16.1	—	2.8	灰白 N 7/0	はげて劣る。天井部は直線へラ削りが施される。	奈良
		壺						
145	複数	須恵器	—	—	2.5	灰 10Y5/1	丸底の壺の底面のみ残存。口縁へラ削りが施される。外側底部には「×」の字次に跡みがある。胎土は粗面で、表面に砂粒が混じる。	不明
		壺						

( ) 内の数値は測定の法差、( ) 内の数値は残存部の法差を表す

Tab26. SX029 出土遺物観察表

## IV. まとめ

### 1. 第 82 次調査の成果

比恵遺跡群の調査は、今回で第 82 次を数えることからも、これまで頻繁に発掘調査が繰り返されたことが物語られている。それは市街地ということで開発にさらされる頻度の多さや、内包する遺跡が旧石器時代から中世にかけてと、幅があり広範囲に及ぶのもさることながら、遺構及び遺物の密度もかなり高い内容にあることがあげられる。その中でも弥生時代が主体となるのは、あえて言うに及ばず、当然に第 82 次発掘調査でも、この弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけての遺構が主体となっている。

そこで確認された主な遺構数を列記してみると、井戸跡がとびぬけて多く 22 基であるのに対し、竪穴式住居跡は僅か 2 軒である。こうした数量の構成から、一見するとかなり不自然な印象を受けることは否めない。しかし、今回の調査箇所を含む周辺部を見回すと、後世の大規模開発において、平坦化されていることに気づかれる。すると掘り込みの浅い、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などのような遺構は、既に消滅してしまったと推測される。それ故に余りにも多い感じた井戸跡は、単純に深いという理由から残存し易かったと判断できる。そうするとどうであろう、比恵遺跡には大規模な集落が形成されていた景観が見えてきそうである。

その井戸跡であるが、ほとんどどの遺構の底からは、完全な形をした甕や壺が多数出土する。それも弥生時代中期の出土量が最も多く、器面を鮮やかに丹塗りし、さらには磨きを施す手の込んだものも少なくない。こうした状況の背景には、井戸を潰す際の祭祀行為を読み取ることができる。これは何も今回の調査だけに限った事ではないが、以前の事例も含めると、比恵遺跡では普遍的に行われていた行為と捉える事ができる。

後期以降になると一つの井戸跡から出土する、完全な形をした土器の量は減少する傾向にある。その中にあって SE021 から出土した長頸壺のように、その張り出した肩部には簡素だが洗練された線刻画が描かれるものもある。いったい何をモチーフにしたかは、見る側の夫々に受け取りようもあるだろうが、その意匠性に弥生人の感性を微妙に触れた思いがする。そして弥生の優美な土器に代わり、庄内系や布留系と思われる搬入系土器の姿が目立つようになる。

ところで SE003・SE027・SE028 からは、大型の甕が出土しているが、肩部のみ、あるいは肩部下半分が全く認められない点に注目しておきたい。出土した時の状況は、井戸跡の下層から破片が折り重なるようにして確認された。こうした状況から、当初は投棄されたものと考えていたが、接合してみると下半分が打ち欠いて無いのである。これも祭祀的な意図の可能性を推測してみたが、例えれば井戸の枠など機能的な要素も同時に考えられる。とすれば、どの辺りに据えられていたのかが問題となってくる。それは地上であれば井戸的なものであり、壁面では井戸側となり、底においては水溜の機能と場所によって機能性は全く異なるからに他ならない。

さて、出土時の位置関係を改めて検討してみると、いずれもが底面から少し浮いた位置にある。つまりは、底に据えられたものではないことはこれで判断できる。次に土器と井戸の直径を比較すると、井戸の掘り込みの方はどうしても大きい。要するに板材などで桟木を渡さない限り、直接は据えることは不可能と言える。では、井戸の途中ではどうであろうか。甕の破片が集中して確認されるのは、八女粘土層が井戸壁面となるの深さである。この上面には鳥柄ローム層がのっているが、遺構はこの

面を掘り込み確認される。鳥栖ローム層は硬くしまり堆積しているのに対し、八女粘土層は緩く脆い。実際に今回の発掘途中でも、滲みだす湧水も手伝い、八女粘土層はさらに脆弱化しては崩落を繰り返した。今回確認した他の多くの井戸跡も同様に、おおよそその部分が大きく抉れているのをよく見かけた。こうした形状は構築時の原型ではなく、自然に崩落した結果において形成されたものと捉えられ、著しいものは袋状にまで及ぶ。そうすると、この最も脆弱な箇所には、井壁を保持させる工夫が必要とされ、円筒にした大型の甕が用いられたと推測する。その出土状況も、井壁の土圧に耐えかねてか、内側に折り重なるような状態であった。

## 2. 比恵遺跡群の意義

比恵遺跡群の周囲をざっと見渡すだけでも、東には浅い谷地形を境に那珂遺跡群が連続し、前方後円墳である那珂八幡古墳と東光寺剣塚古墳も内包する。さらに南側に限をやれば、主なものでは板付遺跡・諸岡遺跡群・井尻遺跡群等々、また御笠川を挟んだ対岸側には雀居遺跡をはじめ枚挙がない。少し春日丘陵まで足を延ばせば、奴国を中心地であり、その権力者を埋葬したと考えられる須弥岡本遺跡や、これを取り巻く多くの遺跡群が所歎しと点在し、まさに福岡平野においても弥生から古墳時代にかけて遺跡銀座の観を呈する。

ところで比恵遺跡群の変遷は、まず弥生時代前期に台地の北側と西側に集落が出現することにはじまる。そして中期になると集落は、台地全体に広がる様相をみせ、中央部には豪相墓が構築される。さらに後期に入ると青銅器生産に用いる上製取瓶が第40次調査で、さらに第48次では広形鋸矛鎌型が確認され、生産活動も積極的に行われていたことを窺わせる。

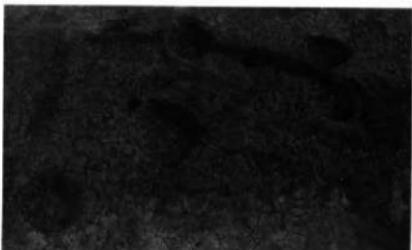
古墳時代も相変わらず營みは継続されていくが、後期になると大型の掘立柱建物群やこれに伴う柵列が、第8次調査で認められている。これについては、『日本書紀』宣化元(536)年五月条に「官家を那津の口に修り造て・・・亦諸郡に課せて分り移して、那津の山に聚めて建て・・・」と見られる、この「那津官家」の可能性が指摘されている。さらに北東側に約300m離れた第13次調査でも、規模の大きな掘立柱建物跡と柵列が発見されており蓋然性が高まった。

実に簡単ではあるが、こうして比恵遺跡群の概要を眺めただけでも、この地域一帯がいかに弥生及び古墳時代を知る上で重要であるか理解できるはずだ。それは一地域に留まるものではなく、噛み砕いて言うならば、このアジアの東端とも言える列島内で、いち早く稻作文化を受け入れた先進地域として、さらに57年の『後漢書東夷伝』、3世紀代の『魏志倭人伝』と、中国側の史料に二度も登場する奴国故地でもある。そして大和政権の対外交政策の機能をも併せ持ったであろう官衙の存在へと、迷録とこの地に統く歴史は、常に大陸との関係の中で語られる舞台であった。そう考えると比恵遺跡群が携わった役割も、決して少なくないはずである。

JR博多駅の南側、市街地という崩発の波に常にさらされ続けた場所にあって、よく今日まで貴重な資料をとどめてくれた。まだまだ多くの問題点を残すところが多く、言い換えるなら弥生文化の受容、クニの発生と消長、人和政権の外交政策と九州の内治など、注目に値する史実が数多く内包されている。こうした課題を一つ一つ明らかにして行く上で、比恵遺跡群の持つ価値というものは更に高まりを見せるであろうし、そうした認識の下で多くの市民にも親しまれる遺跡であることを願ってやまない。



①. SC006 壁穴式住居跡（南西から）



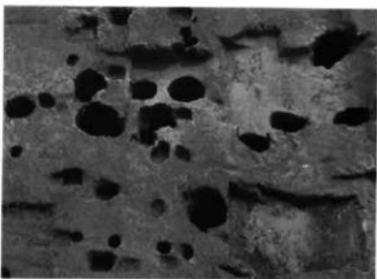
②. SC007 壁穴式住居跡（北西から）



③. SD015・016 溝跡（北東から）

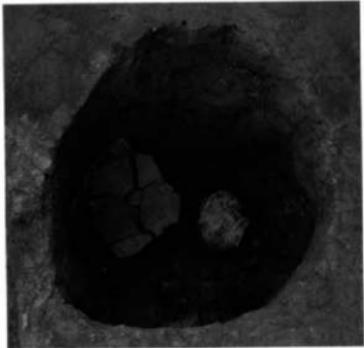


④. SD015 溝跡 作業風景（北東から）



⑤. 調査地区中央付近の井戸跡集中箇所（北東から）

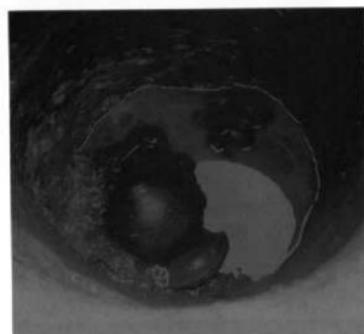
## PL2



⑥. SE001 井戸跡遺物出土状況（南東から）



⑦. SE005 井戸跡遺物出土状況（北から）



⑧. SE009 井戸跡遺物出土状況（西から）



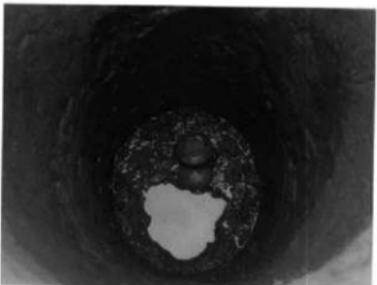
⑨. SE009 井戸跡から出土した壺



⑩. SE019 井戸跡遺物出土状況（北西から）



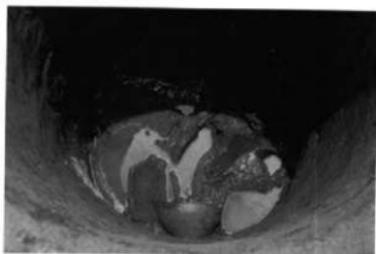
⑪. SE021 井戸跡遺物出土状況（南西から）



⑫ . SEO25 井戸跡遺物出土状況（南から）



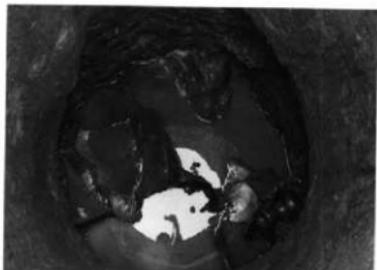
⑬ . 井戸跡掘削作業風景



⑭ . SEO27 井戸跡下層上面遺物出土状況  
(北西から)



⑮ . SEO28 半裁完掘状況（北から）

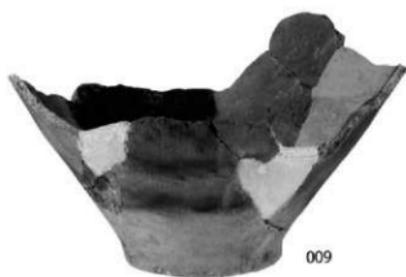
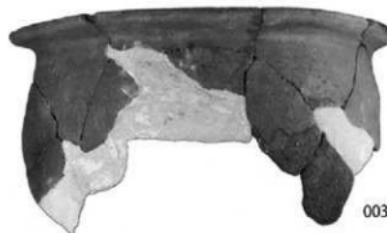


⑯ . SEO28 井戸跡下層上面遺物出土状況（北から）



⑰ . SX029 不明遺構（北東から）

PL4

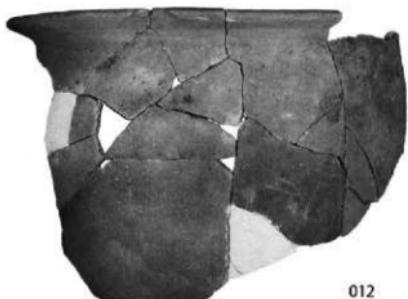




010



011



012



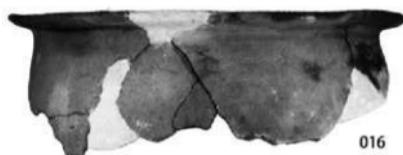
013



014



015



016



017



018

PL6



019



020



021



022



023



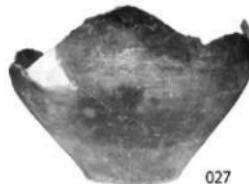
024



025



026



027



028



029



030



031



032



033



034



035



036



037



038



039



040



041



042

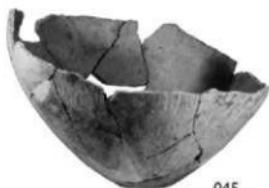
PL8



043



044



045



046



047



048



049



050



051



052



053



054



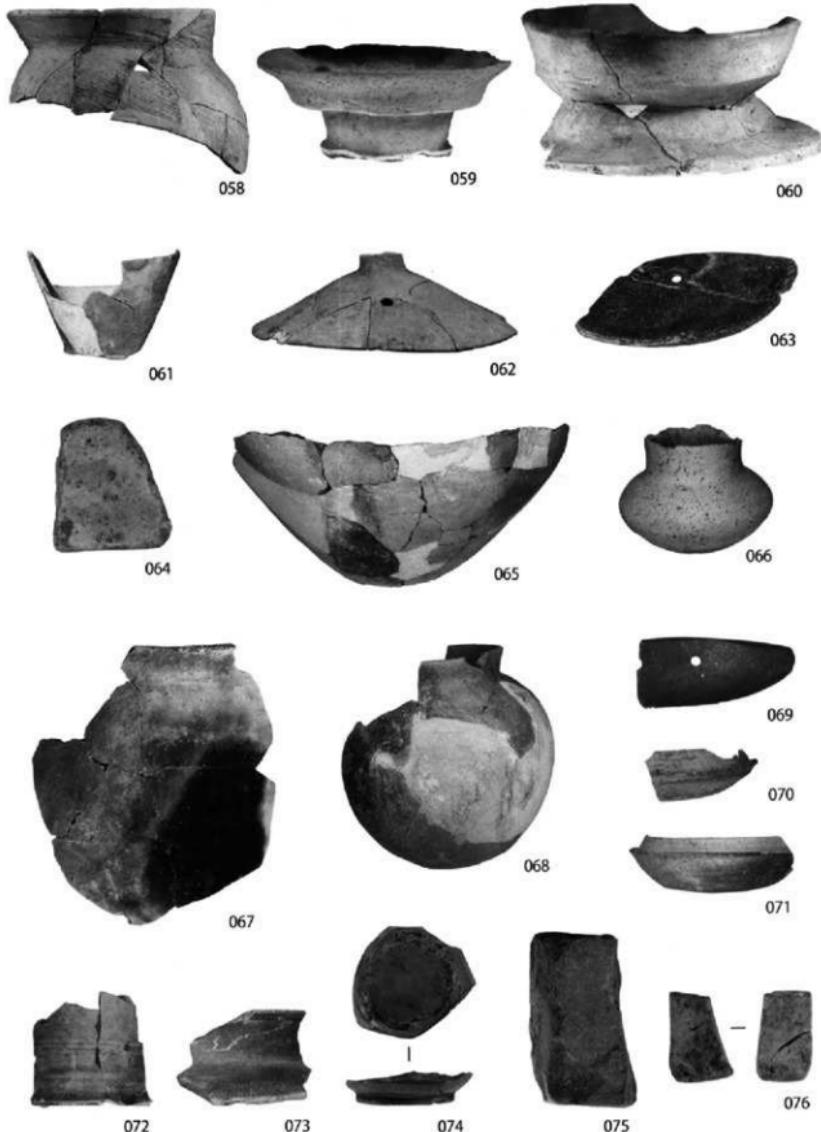
055



056



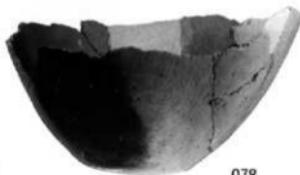
057



**PL10**



077



078



079



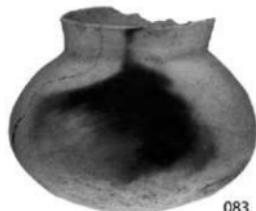
080



081



082



083



084



085



086



087



088



**PL12**



100



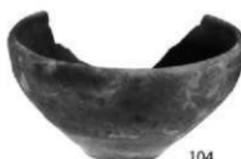
101



102



103



104



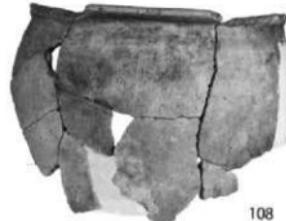
105



106



107



108



109



110



111



112



113



114



115



116



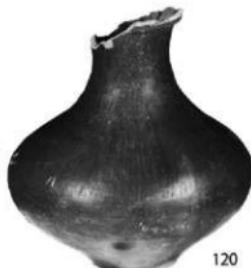
117



118

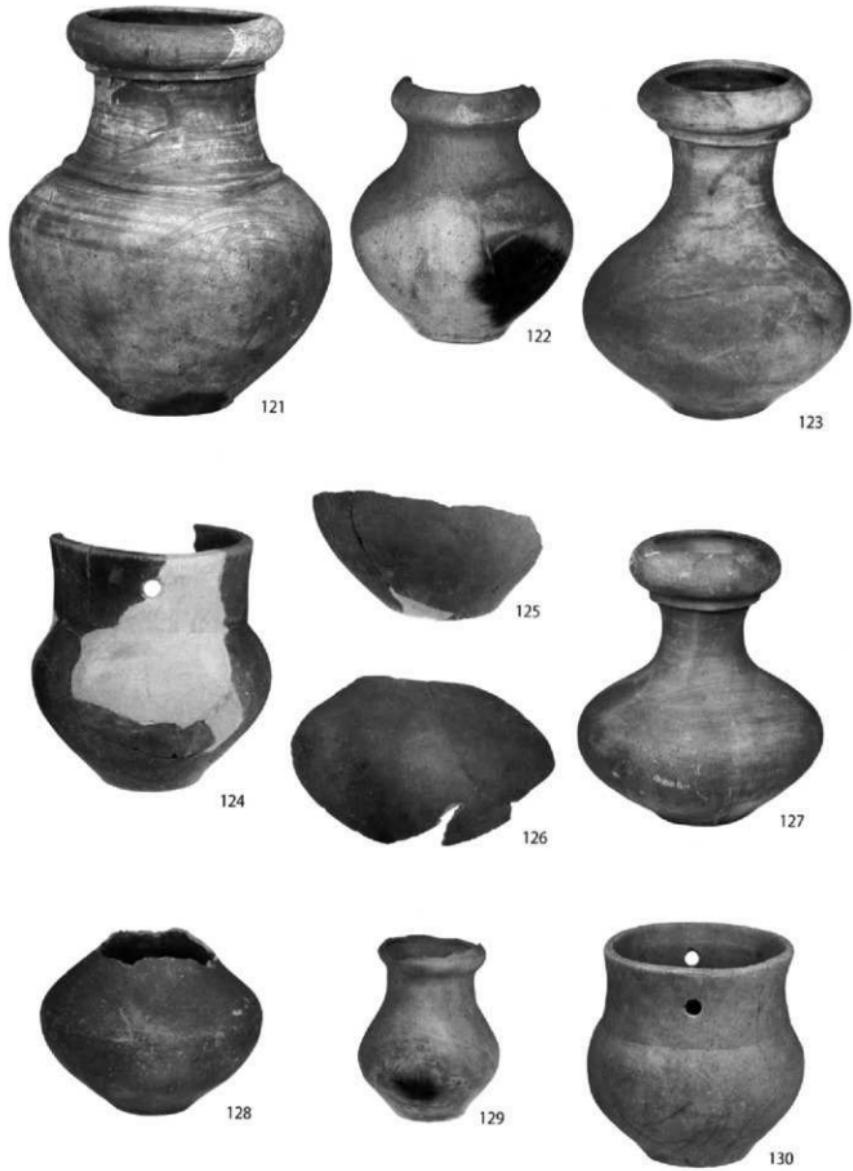


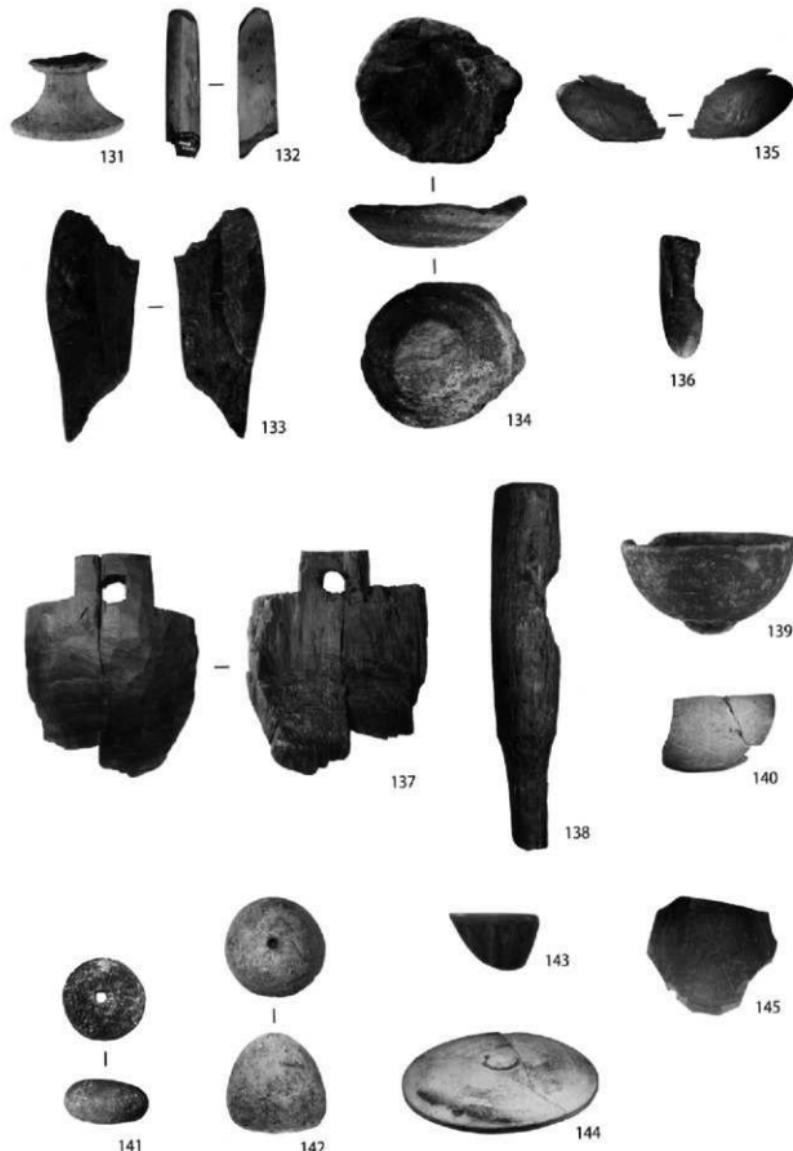
119



120

**PL14**





## 報告書抄録

ふりがな	ひえいせきぐん							
書名	比恵遺跡群							
調査名	第82次調査報告							
卷次	37							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第832集							
編著者名	堀苑孝志 中山 浩 人江俊之							
編集機関	岡三リビック株式会社 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒108-0023 東京都港区芝浦4-16-23 AQUA CITY芝浦 TEL 03-5442-1980							
発行年月日	2004年8月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東經 °' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
比恵遺跡群	福岡県 福岡市 博多区 博多駅 南6丁目9番7 号	市町村	遺跡番号	33° 34' 25"	130° 26' 03"	2003.5.6 ~ 2003.8.14	約1360.0	大型食料品店 店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
比恵遺跡群	集落	弥生時代 ~古墳時代	堅穴住居 2軒 井戸 22基 溝 3条 土坑 1基	弥生式上器 須恵器 十師器 石製品 木製品 貿易陶器			弥生時代中期から古墳 時代の集落跡。	

---

福岡市埋蔵文化財調査報告書第832集

## 比恵遺跡群37

2004.8.31

発行 岡三リビック埋蔵文化財調査室

東京都港区芝浦四丁目16番23号

印刷 (株)第一印刷所

東京都台東区根岸二丁目14番18号

---

